第 62 回国際学生会議

The 62nd International Student Conference

事業報告書

開かれた対話から実感する多様性

~未来を創る私たちが今考えよう~

Experiencing Diversity through Communication

~Let's think about our future!~

ISC

International Student Conference

ISC

International Student Conference

目次

第 1 章　国際学生会議　…p.1

実行委員長挨拶　…p.2
開催目的　…p.3
国際学生会議の沿革　…p.4

第 2 章　第 62 回国際学生会議　…p.5

概要　…p.6
総合テーマ　…p.8
日程　…p.9
プログラム全体の流れ　…p.10
参加者名簿　…p.11
スタッフ名簿　…p.13

第 3 章　事前研修旅行　…p.15

事前研修旅行総括　…p.16
各支部事前研修旅行報告　…p.17

第 4 章　本会議　…p.32

全体総括　…p.33
各分科会報告　…p.34
分科会総括　…p.65
各プログラム報告　…p.66

第 5 章　感想　…p.71

ISC62 の感想　…p.72
ディスカッションに対するフィードバック　…p.77

第１章　国際学生会議

実行委員長挨拶

開催目的

国際学生会議の沿革

実行委員長挨拶

拝啓　時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度、2016 年 8 月 25 日から 9 月 6 日の 13 日間にかけて、第 62 回国際学生会議を開催いたしました。開催にあたりましては多くの財団様、後援団体様、そして個人の方からも多大なるご協力をいただき、大変感謝しております。多くの方にご指導いただき、本会議を開催することができました。

本年度は「開かれた対話から実感する多様性～未来を創る私たちが今考えよう～」という総合テーマを設定して開催して参りました。日本各地・世界各地から集まった学生たちは、互いを知り、受け入れ、真剣に悩み、苦楽を共にしてきました。率直に対話することで相手を知り、自分を知ることができます。異なる価値観を持つ者同士が話すのは想像以上に難しいことです。しかし、ディスカッションをはじめとするプログラム全体を通して得ることンできる自己理解そして世界各地で活躍していく前途有望な友人こそ、会議が終わってからも長く価値を持つものですし、会議の意義だと考えます。本報告書を通じ、参加者が経験した 13 日間を追憶していただければ幸いです。

本報告書の完成を以て、第 62 回国際学生会議の活動は終了いたします。しかし、ISC62 参加者・実行委員の学生は、解決が困難な問題に対して考えること、学ぶことを続けていくでしょう。本報告書をお読みの皆さまも含め ISC62 に携わったすべての方々の間で、国際的な交流に対する興味関心が強まり、更なる議論が繰り広げられること。その結果、第 62 回国際学生会議が、世界平和という理想への一助になること、そして国際学生会議が今後も末永く開催されることを心より願っております。

敬具

2016 年 9 月吉日
第 62 回国際学生会議実行委員長
加茂悠希

開催目的

ISC62 の開催目的は、「学生同士による国籍を超えた相互理解とそれに伴う世界平和への貢献」と「日本の魅力を日本人が再認識し、外国から来た人にも伝える」の二点である。

2016 年の夏、東京に集まった世界各国の学生が、約 10 日間にわたって共同生活を送り、相互の価値観や思考、経験のちがいに直面する。真剣な議論や対話を通じて認識した互いの差異を、衝突を乗り越えて合意を形成しようと試みることが、参加者の文化的背景等の多様性を理解することにつながる。日常会話だけでなく、社会問題の議論というコミュニケーションの場をつくり、多面的なコミュニケーションを密に繰り返す。これは、一般的な海外経験では得難い経験であり、参加者同士の確固たる関係の礎となる。本会議中に行なった交流や対話から新たな思考や行動を得ることになる各参加者は、様々な国民や宗教が共存する現代世界の中で、多様性を尊重し、寛容さを備えた世界平和の担い手の一人となることだろう。

学生の目線に立って研修旅行や文化体験などの企画を運営することで、世界の学生が求めている、日本の魅力を効果的に伝えていく。実行委員や参加者が本会議に携わる過程で、日本人参加者自身も、日本特有の価値観を相対化し、日本の魅力を再認識する。

ISC62 では、以上二点の開催目的に向け、「開かれた対話から実感する多様性～未来を創る私たちが今考えよう～」という総合テーマを掲げている。これは ISC62 が、2016 年の夏の“今”考えるべき問題を、“学生”だからこそ可能な率直さで取り組んでいく決意を示すものである。時には衝突も辞さない学生同士の忌憚のない対話を通じ、様々な問題に対する学生らしい示唆や気づきを社会に対して発信することを目指していく。

このように本会議を通じて、それぞれの形で世界平和へ貢献することが ISC62 の最大の目的であり、使命である。

国際学生会議の沿革

国際学生会議の母体は、1934 年に始められた日米学生会議にある。日米開戦前夜両国の関係の悪化を憂える学生有志が奔走し、「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間においての率直な意見の交換、及び、相互理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下に、第 1 回日米学生会議が青山学院大学において行われた。会議は 1940 年まで続けられたが、1941 年の日米開戦により中断の憂き目を見ることとなる。

戦後、日本の新しい胎動の中で、1947 年に戦争の反省を踏まえ、「各国の親善と正しい理解こそが国際平和達成への唯一の道である」という認識の下、第 8 回日米学生会議が日本で開催された。その後、1954 年にアメリカで行われた第 15 回会議を最後に日米学生会議は解消され、国際学生会議へとその流れは継承された。日米学生会議は、1964 年に OB の手により再結成され現在も行われている。

第 1 回国際学生会議は、1954 年に 12 カ国から 84 名の外国人の参加を得て、28 日間にわたり東京、関西、北海道、仙台で行われた。以後国際学生会議は、国際政治、経済、社会、文化などの多方面からの活発な討論と研修旅行を行って発展していくが、その時々の世界情勢とともに多くの屈折を経ている。1962 年の第 9 回国際学生会議では、従来の本会議、研修旅行に加えて、団体代表者会議が新しく設けられ、会議をより有効なものにするために、決議をもって団体間の具体的協力活動を提起した。それによって、以後の会議の充実と参加団体間のより強い結束を目指した。

1968 年には、学生運動のなか日本国際学生協会の中央委員会が分裂し、翌年の国際学生会議は行われなかったが、1970 年には会議が再開された。第 32 回においては、日本人参加者選抜制度を廃止し、国際学生協会員への国際交流の場を広げた。また、第 37 回では、帯広市とのタイアップにより、市民の方と国際交流の体験を共にした。そして第 43 回には参加国が計 16 カ国に上がる成果をあげることができた。2014 年には、第 60 回という節目の回を迎えた。以上のような経緯を経て、2016 年夏、第 62 回国際学生会議を開催したいと考えている。

第 2 章　第 62 回国際学生会議

概要

総合テーマ

日程

プログラム全体の流れ

参加者名簿

スタッフ名簿

概要

会期・場所	・事前研修旅行　8 月 25 日～28 日 （京都、大阪、神戸、岡山、九州の各地で開催） ・本会議　8 月 29 日～9 月 4 日 （国立オリンピック記念青少年総合センター） 9 月 5 日～9 月 6 日 （東京セントラルユースホステル）
総合テーマ	『開かれた対話から実感する多様性 ～未来を創る私たちが今考えよう～』
分科会テーマ	・ユース世代の難民問題 ～教育・経済的支援からのアプローチ～ ・教育による幸福の実現可能性 ～多様な地域と人に根ざした社会の在り方～ ・人道的介入 ～「地球市民」の限界と可能性～ ・持続可能な社会と国際協力 ～女性の人権から見る社会～ ・平和に向けた最善の政策決定プロセスとは? ～熟議民主主義～
ねらい	様々な価値観、考えを認め合うことで真の相互理解を達成すると同時に、各国を代表する学生が ISC プログラムを通して学び、成長する。
公用語	英語
参加者	日本人学生　36 名（内、実行委員 16 名） 外国人学生　19 名
参加費	日本人学生　5 万円 外国人学生　2 万円
内容	分科会における問題定義、議論 成果発表会（サマリー発表） 日本文化体験/ 東京観光/ 各種交流会

〈ISC62　参加大学〉

慶應義塾大学、聖心女子大学、早稲田大学、創価大学、法政大学、東京大学、東洋外国語大学、国際基督教大学、一橋大学、青山学院大学、東京女子大学、横浜市立大学、亜細亜大学、京都大学、関西学院大学、関西大学、神戸女学院大学、琉球大学　（計 18 大学）

〈ISC62 参加国・地域〉

インドネシア、フィリピン、ベトナム、ブルガリア、日本　（計 5 ヶ国）

総合テーマ

開かれた対話から実感する多様性
～未来を創る私たちが今考えよう～

今年の総合テーマは「多様性」をキーワードとしている。プログラムに含まれている議論や企画から、参加する世界の学生が対話を促進し、相互の多様性を実感してもらいたい。そのような想いを込めている。

① 対話の扉を開いてはじめて、私たちは議論のテーブルに立つことができる。

国際学生会議のメインプログラムは「分科会での議論」です。多様な参加者による活発な議論を、合意に導いていくのは容易なことではありません。最終盤の成果発表会に向けて、私たちの議論を結実させるには、他者と前向きに向き合い、対話を続ける姿勢が不可欠です。分科会の内外で、議論のテーマにとどまらず、様々な話題について話しあってこそ、議論という本来の目的も最大限に達成されることでしょう。

② 濃密な本会議のプログラムを通じ、参加者の多様性を感じる。

本会議では、朝から晩まで行動を共にするので、多くの対話の機会があります。分科会では様々な主張や意見の応酬があるでしょう。一方、文化体験やフィールドワークといった企画や東京各地に飛び出すスタディーツアーの場では、自分の議論のメンバーだけでなく、日本各地・世界各地からの参加者と共に、精一杯楽しみます。8 泊 9 日という限られた期間ですが、短期間であっても、遠慮なく議論し交流することで、参加者の多様性も感じることにつながります。

③ 未来について、「私たちが」「今」考える価値について考える。

私たちが生きる未来の世界を創るのは、私たち自身です。私たちは数年後、数十年後に世界各地のあらゆる場所で、山積する社会問題に向き合うことになるでしょう。実際に社会問題に向き合う際には、何らかの立場をとることは避けられません。つまり、自分が持つ価値観に基づいて率直に意見を表明し、文化的背景の異なる他者と忌憚なく意見をぶつけ合うことができるのは、学生の今だからこそできる体験ではないでしょうか。参加者にとって、本会議における他者との衝突や合意形成の体験が、各個人のモノの見方や考え方を揺るがし、その先の人生にも影響を及ぼすことにもなります。

日程

<table>
<tr><th colspan="3">事前研修旅行</th></tr>
<tr><td>8 月 25 日(木)
8 月 26 日(金)
8 月 27 日(土)
8 月 28 日(日)</td><td colspan="2">神戸・大阪・京都・岡山・九州
各地にて開催</td></tr>
<tr><th colspan="3">本会議</th></tr>
<tr><td>8 月 29 日(月)</td><td>開会式
基調講演
ウェルカムパーティー</td><td rowspan="7">国立オリンピック
記念青少年
総合センター</td></tr>
<tr><td>8 月 30 日(火)</td><td>分科会 1
分科会 2
日本文化体験</td></tr>
<tr><td>8 月 31 日(水)</td><td>分科会 3
フィールドワーク
分科会 4</td></tr>
<tr><td>9 月 1 日(木)</td><td>分科会 5
分科会 6
レクリエーション</td></tr>
<tr><td>9 月 2 日(金)</td><td>本会議研修旅行</td></tr>
<tr><td>9 月 3 日(土)</td><td>分科会 7
分科会 8
分科会 9</td></tr>
<tr><td>9 月 4 日(日)</td><td>分科会 10
分科会 11
分科会 12</td></tr>
<tr><td>9 月 5 日(月)</td><td>成果発表会
フェアウェルパーティー</td><td rowspan="2">東京セントラル
ユースホステル</td></tr>
<tr><td>9 月 6 日(火)</td><td>閉会式
解散</td></tr>
</table>

プログラム全体の流れ

2015 年 11 月　《第 62 回国際学生会議実行委員会発足》

2016 年 3 月・4 月　《各地説明会》

参加者募集のため、関東・関西両域で大学施設や公的施設を利用して、説明会を実施しました。インターネットや、全国の大学へのチラシの配布・掲示を利用した広報に加え、実行委員と参加者が顔をあわせる説明会を行ったことで説明会参加者に国際学生会議の雰囲気を伝えることができました。

2016 年 5 月　《選考》

参加者の選考を参加申込書・面接の 2 行程で行いました。参加申込書では希望のテーブルテーマを選んだ理由やその時点での考えを問い、面接では実際に話す事で伝わってくるモチベーションやコミュニケーション能力、強みや弱みといった、テーブルでディスカッションを行うにあたり重要となる要素を確認しました。また、面接の中で英語力に関しての確認を行うことで会議自体の英語のレベルを保つことにも注力しました。

2016 年 7 月 16 日・17 日　《参加者招集会》

今年も昨年度と同様、国内参加者の顔合わせである招集会を合宿形式で行いました。目的としては、例年と変わらず、全体での交流を図り、本会議を円滑に進めるためのリレーション構築を行うこと、及び本会議でのディスカッションに備えての英語力の把握と興味範囲の確認、そしてディスカッションに慣れることです。合宿形式により、スケジュールに余裕を持ち、より長い時間を共に行動することにより目的を達成し、有意義な招集会とすることができました。

2016 年 7 月・8 月　《各テーブルでの勉強会》

本会議前に 1 回及び 2 回の勉強会を国内参加者で実施しました。どのテーブルも事前に課題を課すことで効率的に勉強会を進め、議論のための知識を定着することができました。また、日本人が不得意とする英語での専門用語の確認や、英語でのディスカッション練習を行ったことで、本会議中のディスカッションを円滑に進めることができました。あくまで日本で実施するものであり海外参加者は参加できませんが、同様に課題を出し、インターネット上で共有する、あるいは日本での事前勉強会での結果を本会議までに共有し意見を出し合うといったことをオンラインで行うことで、意識面・知識面で乖離が起きないよう配慮しました。

参加者名簿

Table 1　ユース世代の難民問題 ～教育・経済的アプローチ～

石田まゆ	聖心女子大学	Japan
白水清美	創価大学	Japan
藤澤明子	慶應義塾大学	Japan
森川遥香	琉球大学	Japan
Basudewo Jati Kusumo	University of Indonesia	Indonesia
Hoàng Huỳnh Công Phúc	Vietnam Aviation Academy	Vietnam
Juni Arina Khairiyati	University of Indonesia	Indonesia
Alyssa Marcel Masiba Rances	Capitol University	Philippines

Table 2　教育による幸福の実現可能性と限界 ～多様な地域と人に根ざした社会の在り方～

浅間菜通子	聖心女子大学	Japan
小澤早紀	青山学院大学	Japan
堺竜哉	早稲田大学	Japan
吉田梨紗	慶應義塾大学	Japan
Cordova Putra Handri Ansyah	University of Indonesia	Indonesia
Lê Lưu Huệ Dinh	University of Finance-Marketing	Vietnam
Mutiara Marganita	Polytechnic of state FinanceSTAN	Indonesia
Trần Quốc Uyên Nghi	Hoa Sen University	Vietnam

Table 3　人道的介入 ～「地球市民」の限界と可能性について～

新井綾乃	法政大学	Japan
猪飼奈々	京都大学	Japan
常恵喬	東京外国語大学	Japan
渡邊徳章	創価大学	Japan
Cesar Eenesto Mapa Suplido	De La Salle University	Philippines
Radoslav Georgiev Georgiv	University of Economics	Bulgaria
Muhammado Fajirin	Bandung Institute of technology	Indonesia
Nguyen Dinh Van Anh	Ho Chi Minh University of Law	Vietnam

Table 4　持続可能な社会と国際協力 ～女性の人権から見る社会～

久保田弾	慶應義塾大学	Japan
西島久美子	東京女子大学	Japan
藤原聖史	京都大学	Japan
若菜梨紗	東京外国語大学	Japan
蜂谷祐季	早稲田大学	Japan
Tran Anh Thu	HUFLIT University	Vietnam
Giovanni Kela Kusumadewa	University of Indonesia	Indonesia
Hadiansyah Yanuar Rizqi Aktsar	Jakarta Institute of Arts	Indonesia
Hanny Lovita Pandiani	University Presetiya Mulya	Indonesia

Table 5　最善な政策決定プロセスとは ～熟議民主主義～

小松由依	東京外国語大学	Japan
田畑陽菜	関西学院大学	Japan
松本滉司	東京大学	Japan
Kemara Sukma Vinaya	University of Indonesia	Indonesia
Noviyanti	University of Indonesia	Indonesia

スタッフ名簿

第 62 回国際学生会議実行委員会

実行委員長		加茂悠希	一橋大学 3 年
副実行委員長		才内麻里菜	関西学院大学 3 年
財務	部長	山岡淳奈	東京女子大学 3 年
	スタッフ	宮本裕樹	一橋大学 3 年
広報	部長	太田垣百合子	神戸女学院大学 3 年
	スタッフ	増子詩織	亜細亜大学 3 年
国際渉外	部長	中西智美	関西大学 3 年
	スタッフ	生駒比奈子	創価大学 2 年
企画		石塚啓太	国際基督教大 2 年
ST		土屋瞳	関西学院大学 2 年
テーブルチーフ	部長	山本昂亮	早稲田大学 4 年
		瀬戸口舞	横浜市立大学 4 年
		奥山杏子	上智大学 1 年
		丸山瑞稀	早稲田大学 3 年
		塩田なつめ	京都大学 1 年
撮影係		浅井飛鷹	京都大学 2 年

各支部研修旅行実行委員長

京都支部	碇浩崇	同志社大学 3 年
大阪支部	高田加奈子	関西大学 3 年
神戸支部	中本賢	神戸大学 3 年
岡山支部	三宅希実	ノートルダム清心女子大学 2 年
九州支部	木内理賀	北九州市立大学 2 年

日本国際学生協会中央役員

会長	廣田泰博	関西大学 4 年
中央事務局長	田中楓梨	関西学院大学 4 年
財務部長	市口尚義	関西大学 3 年
広報部長	三田華奈子	京都女子大学 3 年
派遣部長	中川怜士	甲南大学 3 年
企画部長	橋本樹	岡山大学 3 年

各支部支部長

東京支部長	新井綾乃	法政大学 3 年
京都支部長	藤田鈴音	同志社女子大学 3 年
大阪支部長	高田加奈子	関西大学 3 年
神戸支部長	小菅耕汰	関西学院大学 3 年
岡山支部長	長谷川麟	岡山大学 3 年
九州支部長	上原桃香	北九州市立大学 3 年
名古屋代表	柴田紗衣佳	南山大学 2 年

第３章　事前研修旅行

事前研修旅行総括

各支部事前研修旅行報告

事前研修旅行総括

事前研修旅行責任者　土屋瞳

1. 事前研修旅行概要

母団体である日本国際学生協会（以下 I.S.A.）のプログラムの一つである国際学生会議（以下 ISC）に参加する海外参加者を I.S.A.の各支部（神戸、大阪、京都、岡山、九州）に派遣し、I.S.A.会員からの事前研修旅行参加者とともに観光や文化交流を行います。これは各支部の実行委員が企画し、ISC 本会議前に行われるもので、今年は 8 月 25 日から 8 月 28 日に行いました。目的は、本会議前に海外参加者に日本文化に慣れてもらうことと、国内参加者が I.S.A.会員や海外参加者と交流できる機会を設けることです。

2. 事前研修旅行意義

事前研修旅行の意義で最も重要なことは、ISC に参加する海外参加者が日本の文化・慣習に触れてから本会議に臨んでもらうことです。そして、I.S.A.会員にとって、国際交流へのステップを踏む機会を提供することです。

企画から参加まで、全て『学生』が主体となって動くこの事前研修旅行には『学生』ならではの発想と視点から企画された様々なプランがあります。

3. 総括

今年の事前研修旅行では、例年と違い海外参加者の負担軽減のため、全支部の移動手段を新幹線にしました。そのため、事前研修旅行が 3 日間と短くなってしまいましたが、各支部が時間の短い中、内容の濃いものを作りあげてくれました。また最終日はホスト DAY として、海外参加者とホストが自分達のしたいことをすることで、例年以上に交流する時間が増え、両者の間で強い絆が生まれました。

事前研修旅行は本会議の参加者全員が参加するわけではなく、また英語が堪能でない日本人が多く参加するので、ISC の中でも特異な存在となっています。しかし、事前研修旅行があるからこそ、海外参加者が日本の文化に親しみやすくなり、9 日間という長期間にも及ぶ本会議を乗り越えることができます。一方で、I.S.A.会員は、新たな日本文化の一面を気づいたり、国際交流への第一歩として利用したりと人それぞれに得るものがあったと思います。その事前研修旅行に関われたことは、自分にとって大きな財産になったと思っています。

最後になりましたが、この事前研修旅行を開催するにあたって企画に携わってくださった各支部実行委員長をはじめとする実行委員の皆様、参加してくださった I.S.A.会員の皆様、協力してくださったすべての方に感謝致します。これからも、事前研修旅行が日本人と海外参加者の懸け橋として無事に開催され、関わる全ての人の心に残り続けるものであることを願います。

京都支部　総括

実行委員長　碇浩崇

今年の一番の失敗点は人数不足です。一人当たりの仕事量が多く負担が重くなるほど仕事のクオリティ維持が難しくなると痛感しました。しかしながら全員が全ての企画の細部まで把握できているといった情報共有はスムーズでした。

今年の京都 ST の成功した点、失敗した点を次年度以降につなげてもらうために１日目から４日目まで振り返ってそれぞれのべることにします。

ではまず１日目ですが事前の下見で一番不安だったことは外国人参加者が疲れ切ってしまうことでした。伏見稲荷の道中には折り返して麓へ戻る別れ道が数多くあるのでそのつどどちらを行きたいか尋ねていましたが全員が頂上までいくことを選択してくれたことから疲れ切ってしまうということはなかったようです。ホストファミリーと外国人参加者ばかりが会話をしている場面が散見していたのは残念でした。

２・３日目ですが用意していた企画じたいは成功でした。参加者全員の距離を縮めるためのレクレーションや話しやすい話題を振ったりすることが成功につながった点であったと思います。この２・３日目で感じた改善すべき点は企画外の時間での参加者の温度差です。みんなで遊べる玩具（UNO、ジェンガ、トランプ）を用意していたのですが興味のない人もいたようでした。原因として有力なのは英語力だと思われます。事前に日本人参加者のみで勉強しておくなど次回につなげともらいたいです。

４日目では外国人参加者の要望を重視しお土産をみる時間を長めにとりました。これは去年の ST 実行委員長の意見を参考にもしています。

最後に参加してくれた皆さんにはとても感謝しています。ST に従事できたことが間違いなく今年一番の思い出です。成功したことうまくいかなかったことすべてが個人の成長につながると改めて実感したので次年度以降も実行委員会には頑張ってほしいと思います。次年度以降にこの報告書が約に立ってくれるとさいわいです。

京都事前研修旅行参加者の声

原田紗英

私は以前から国際交流に興味があったので京都事前研修旅行に参加させていただきました。国際交流がしたいという思いはありましたが公用語となる英語に自信がなかったため、とても不安でした。初めは自分から話しかけることはほとんどできませんでしたが、だんだん慣れてくるにつれてコミュニケーションを楽しむことができるようになっていきました。海外参加者は好奇心旺盛で、金閣寺やお土産屋さんを見ているときに気になったことをすぐに聞いてくれて、日本に興味を持ってくれていると思うと、とてもうれしかったです。夜ご飯に手巻きずしを作ったり、神社仏閣を見学したり、におい袋を作ったりと日本ならでは、京都ならではの体験を海外参加者と一緒に経験できて、貴重な経験になりました。

京都事前研修旅行は、自国のことを見つめなおす機会にもなりますし、同時に自国のことについて全く知れていなかったと反省しなければいけないということにも気づくことができる素敵な旅行だと思いました。京都事前研修旅行は私にとって初めての英語での国際交流でした。三日間、海外参加者と過ごして、もっと英語を話せるようになりたい、もっと会話を楽しみたいと強く思いましたし、他のプログラムにも積極的に参加していきたいという思いが芽生えました。京都事前研修旅行に参加して前向きな気持ちになれたので私になかで、すごく価値のある三日間で忘れることのできない大切な思い出になりました。

京都事前研修旅行で出会った海外参加者とは今でも連絡を取り続けるほど密な交流ができました。このような経験は私自身初めてなので、とてもうれしく、これからも仲良くしていきたいと思いました。

京都事前研修旅行に参加させていただいて本当に良かったです。また参加させていただきたいです。

《日程》

8 月 25 日：伏見稲荷大社観光

8 月 26 日：金閣寺、高桐院、平野天満宮観光、手巻き寿司

8 月 27 日：匂い袋作り体験、ミッションゲーム（建仁寺等）

大阪支部　総括

実行委員長　高田加奈子

今年は阪神 ST ではなく、神戸と大阪を分けて行いました。大阪ではインドネシアとベトナムから男女二名ずつ計四人の外国人参加者を受け入れました。外国人参加者の皆さんは大変積極的な方が多く、より密な交流が出来たように思います。ISC においても ST のことをたくさん話してくれたと日本人参加者からも聞き、ISC の「事前学習」として少しは役立てられたかなと思います。また私たち日本人参加者への逆サプライズプレゼントもあり、嬉しかったです。

今回の大阪 ST で一番重要視したことは、出来るだけ英語での交流を多くし、密な交流をしてもらうことでした。企画も出来るだけコミのメンバーが介入する内容は避け、交流する場（交流せざるを得ない場）を作りました。一日目のたこ焼きパーティでは、班ごとに具材を相談して買い物に行ってもらい、焼き方の説明などもすべて日本人参加者に任せました。時折、英語での説明に苦戦している様子でしたが、たくさん交流してもらえたのではないかと思います。二日目の大阪丸ごとミッションゲームも班行動で、メンバーが仲良くなれるミッションを盛り込みました。ただこの日は一日中屋外での行動で、かなり疲れたとの声がありました。ミッションゲームの時間を取りすぎたのは反省すべきことだと思います。三日目はたくさんトラブルがありましたが、コミのメンバーの協力により無事企画を終えることが出来ました。しかし、トラブルのせいで着物を着て写真撮影をする時間が極端に短く、外国人参加者の皆さんには申し訳ないことをしてしまいました。着物を着る施設は去年の ST でも企画にありましたが、施設のルールや仕組みが少し変更していたようなので、下見をきちんと行うべきでした。

日本人参加者については全体の八割以上が大阪支部の会員であったため、この点に関しては来年以降対策が必要だと思います。参加費の安さを追求したあまり泊りの企画を入れられなかったことは原因の一つだと思います。大阪支部からの参加者は初めて ISA のプログラムに参加する人が多く、初めての体験に緊張している様子でした。アイスブレイクのビンゴゲームはその緊張をほぐすのにぴったりだったと思います。コミから日本人参加者に対して外国人参加者へのプレゼントを頼んではいませんでしたが、班ごとに寄せ書きやアルバムを用意していてくれ、フェアウェルパーティでは涙を流す参加者も多くみられました。日本人参加者からは、楽しかったという感想だけでなくもっと英語を頑張りたい、コミュニケーション能力を高めたいなどの声も多くありました。三日間だけにとどまらず、ST の参加をきっかけにこれからの国際交流への意識向上に少しでも役立ててもらえたなら、今回の大阪 ST は成功したと言えると思います。

最後になりましたが、参加してくださった外国人参加者の皆さん、日本人参加者の皆さん、コミの皆さん、大阪 ST を支えてくださった皆さんに感謝いたします。そして今回参加してくれたメンバーがまた来年、今年よりもより良い大阪 ST を作ってくれることに期待して最後の挨拶とさせていただきます。

大阪事前研修旅行参加者の声

松本伶菜

私は去年も阪神 ST に参加させていただきましたが、阪神 ST とはまた違った大阪 ST を楽しむことが出来ました。大阪 ST の強みは何といってもその安さだったと思います。阪神 ST と異なり、観光できる場所は大阪だけに限られていましたが、参加人が少なかったので行動なども楽にできたと思います。

一日目のアイスブレイクは外国人参加者の皆さんだけでなく、日本人参加者同士も楽しく交流ができるものでした。たこ焼きパーティでは班のみんなで食料を買いに行き、たこ焼きの具材などを決めました。班ごとにオリジナリティーがあり、他の班のたこ焼きを食べたり具材を交換し合ったりと自分たちの班だけでなく他の班とも交流できました。クーラーの効いた部屋で座って出来る企画だったので、みんなで話をしながら交流が出来ました。夕方にスカイビルに移動しました。展望台でとった写真はお気に入りです。

二日目はミッションゲームでした。フリーパスがあったので、だいたいの観光スポットは自由に行くことが出来ました。行きたいところ、食べたいものなど外国人参加者のニーズに柔軟に対応できる企画だったと思います。案内や説明などは私たち日本人参加者の役目でしたが、なかなかうまく伝えることが出来ず、もどかしい時もありました。一日中外を歩き回ったので少し疲れている人も多いようでした。ミッションゲームのゴールであった住吉大社や阪堺電車は、日本人参加者の私にとっても新鮮で楽しかったです。

三日目は今昔館で着物体験をしたり、水上バスに乗ったりしました。着物体験は去年もありましたが、今回は滞在時間が短かったように思います。今昔館ではラッキーなことに、白無垢姿で写真撮影をしているところに遭遇し、普段見られない光景に外国人参加者の皆さんも興奮気味でした。フェアウェルパーティではミッションゲームの結果発表がありましたが、私たちの班が一位だったのでとても嬉しかったです。景品もかなり豪華で、日本人の私でさえもテンションが上がってしまいました。フェアウェルパーティの終盤には外国人参加者の皆さんからのスピーチに泣きそうになってしまいました。その時に、外国人参加者の皆さんから逆サプライズでケーキのプレゼントがあり、みんなでそのケーキを食べたことが印象に残っています。前日の夜に班のメンバーで作ったアルバムを渡すと泣いて喜んでくれたのでこっちまで泣いてしまいそうでした。

毎日、企画が終わったらみんなでアフターに行ったりと、この三日間は本当に充実したものでした。改めて大阪 ST に参加してよかったと思います。コミの皆さん、お疲れ様でした。

《日程》

8 月 25 日：たこ焼きパーティ、スカイビル見学

8 月 26 日：ミッションゲーム

8 月 27 日：今昔館見学、水上バス、フェアウェルパーティ

神戸支部　総括

実行委員長　中本賢

2016年8月25日～27日，東京で開催された国際学生会議(ISC)の準備段階として，3日間の神戸事前研修旅行を開催しました。今年は，インドネシア・フィリピン・ベトナムから4名，日本人20名（神戸支部16名，他支部4名〈東京・岡山・名古屋〉）の計24名の参加者に恵まれました。以下,「準備段階で心がけたこと」「本番の様子」「感じたこと」の3点をもって，事業報告とします。

「準備段階で心がけたこと」について，今年のテーマを常に念頭においたことがあげられます。『海だ！山だ！神戸だ！～終わりなき夏のST～』というテーマのもと，自然に恵まれる神戸の魅力を出身問わず参加者に楽しんでもらうのに加えて，参加者の思い出や参加者どうしの交流，そして毎年ごとのオリジナリティあふれる魅力的な神戸STが今後も続くように，との願いをこめ，実行委員一同，企画を練り上げてきました。参加者どうしの仲を深めるため，3日間を通して，1つのストーリーができあがるかのような構成をとりました。

「本番の様子」1日目は姫路城・好古園を中心とした姫路観光，2日目は六甲山を舞台に自然体験，3日目は須磨水族館・須磨海岸を舞台にした交流企画を実施しました。上記で述べたような狙いが，外国人に思い通りに伝わったと感じたときは，素直に嬉しかったです。「神戸に住んでいるけれど，いつもの神戸と全然違ってまったくつまらないということがなかった」という参加者の声,「神戸のいいところばっかり体感できて本当によかった」という外国人参加者の声は，今でも印象に残っています。

「感じたこと」皆，思い思いに楽しみ，和気藹々としていました。フェアウェルパーティでは，参加者どうしが踏み込んだ話をしていたり，外国人のみんなが別れの挨拶を述べる時に涙してくれたりしているのを見て，参加者どうしの仲や思い出を深める点は十分に達成できたように感じられました。さらに，ミッションゲームではグループ一丸で好奇心旺盛に目標物を探す参加者，六甲の大自然の中では，羊との自撮りを成功させようと必死な参加者，海ではしゃぎ回り，流れる洋楽に合わせて皆で口ずさむ参加者の姿を見ると，そこには少なくとも「言葉」や「国籍」,「出身」の壁を感じることはなく，むしろ皆ひとりの「人間」として仲間と楽しんでいる姿に，心を和ませられました。

最後にはなりますが，様々な分野にわたって協力してくれた６名の実行委員，本番暖かく迎えてくださった参加者の方々，外国人の受け入れを進んで引き受けてくださったホストの方々，その他企画でお世話になった方々に感謝の意を表し，結びとしたいと思います。

神戸支部研修旅行参加者の声

植木彩水

今回、神戸事前研修旅行に 3 日間参加させていただきました。私は過去 3 年間も神戸事前研修旅行に参加しており、たくさんの出会いやきっかけを頂いてきました。今までの恩返しの気持ちも込めて、最後の年も神戸事前研修旅行に参加しようと決めました。

今年の神戸事前研修旅行は、インドネシア、フィリピン、ベトナムの 3 カ国から 4 名の海外参加者と、20 名の国内参加者で行われました。比較的小規模だったこともあり、参加者全体で非常に密な交流を行うことができたと思います。観光を通して城や庭園などの日本の文化に触れ、目を輝かせる海外参加者の様子は忘れられません。日本に住んでいる私にとっては当たり前であり普通であるはずのことが、海外参加者の反応を見たり、その感想を聞くことによって、見慣れたものも少し立ち止まって考えてみる機会を与えてくれます。そして、改めて日本の誇りを感じさせられます。最終日のフェアウェルパーティーでは、各自思い思いに語り合い、3 日間の思い出に浸りました。よく聞く「世界平和」というものはどうしても大きく聞こえてしまいますが、海外の人との個々間での対話から異文化理解をしていくことができれば、本当に小さいところからでも、世界平和への貢献ができているのではないかと感じました。その機会が、事前研修旅行にはたくさん転がっていると思います。

今回の神戸事前研修旅行は、【日本らしさ、神戸らしさ、夏らしさ、楽しさ】をしっかり感じることができるプランになっていて、日本人で神戸に住んでいる私でも、とても充実した時間を過ごすことができました。何よりも、海外参加者と国内参加者に壁がなく、和やかな雰囲気で交流できていたことが素敵だったと思います。

4 年生の私にとっては、今回が最後の事前研修旅行でした。世界中の人々との出会いや、ホストファミリーをして近い距離で異文化交流をするきっかけを頂いた夏のこの時間は、一生の思い出です。自分の世界を広げる機会を与えてくださった事前研修旅行に今年も参加する事が出来て、本当に良かったです。

最後になりましたが、長い期間、準備運営に関わってくださった国際学生会議の事前研修旅行担当者様、神戸事前研修旅行の実行委員の方々、本当にありがとうございました。

《日程》

8 月 25 日：好古園でお茶体験、姫路城観光（ミッションゲーム）

8 月 26 日：六甲牧場でピクニック、フローズンヨーグルト作り、夕食（お寿司、うどん、オードブル)、ビンゴゲーム、お泊り会

8 月 27 日：須磨水族館、須磨海岸にて海遊び、フェアウェルパーティー

岡山支部　総括

実行委員長　三宅希実

今年の岡山事前研修旅行には、ブルガリアから１名とインドネシアから２名の海外参加者さん、そして日本からは 24 名の方々が参加してくださいました。

0 日目では実行委員とホスト、任意の日本人参加者で海外参加者の方々のお出迎えを行い、日本食のチェーン店で一緒に夕ご飯を食べました。海外参加者の方々は食品サンプルや食券を買うシステムに興味津々で、お腹を満たすとともに主催者側との絆を深めることのできた、大変有意義な時間でした。

1 日目ではいよいよ日本人参加者の方が参加し、アイスブレイクの時間では人間ビンゴや福笑い、折り紙講座などを通して、海外参加者さんに日本の伝統をしってもらいつつ、参加者間の距離を近づけることができました。宿泊先の渋川青少年自然の家に移動してからは水族館や海に行き、夜には浜辺で花火をしました。

２日目にはまず井倉洞という鍾乳洞へ行き、その後夢すき公園で和紙の紙すき体験としてうちわを作りました。比較的日本らしいコンテンツを盛り込んだ２日目は海外参加者の方にも大変楽しんでいただけたようで、ST 期間中に、自分たちで手作りしたうちわを気に入って使ってくださっている姿を多く見、とても嬉しかったです。

そして３日目はまず、大学の書道教室で書道と絵手紙に挑戦しました。絵手紙では、海外参加者さんの画力に度々驚かされ、書道では、書道リレー（一人一筆ずつ書いて四字熟語を完成させる）でとても盛り上がりました。美観地区に移った後には、班行動でミッションゲームをし、すべてのグループで笑顔の花を見ることができました。

フェアウェルパーティーでは、アットホームなこじんまりとしたお店を会場に、参加したすべての人で３日間の思い出話に花を咲かせました。終盤には３日間の総集ムービーを流し、それからサプライズで海外参加者の方に参加者全員から寄せたメッセージカードつきのフォトアルバムを送りました。その場にいたすべての人が感動を共有し、海外参加者の方も涙を流しながら岡山 ST の終わりを惜しんでくださり、我々実行委員が終始大切にしてきた『温かさ』を最後の最後まで貫き通すことができたと思います。

また、お互いの文化や価値観に驚きや関心を持ち、つたない英語であっても笑顔や感動でお互いの心を通じ合わせている、という場面を今回の ST では多く見かけました。３日間という短い期間にもかかわらずこんなにも充実した日々を過ごせたのは、参加者さまをはじめ岡山 ST を支えて下さった皆さまからのお力添えのおかげです。

ご支援ご協力、誠にありがとうございました。

岡山事前研修旅行参加者の声

津地はるか

私は今回初めて参加者という形でこの岡山事前研修旅行に関わらせていただきました。2年間実行委員として関わってきたことにより、いつも「参加者のため」という理念を抱えていました。それが今回はその「参加者」という立場。むつかしいことは何も考えずにただただ、「楽しみだなー」と思いながら本番を心待ちにしていました。

1日目のウェルカムパーティーでは実行委員の流暢な英語から始まり、みんなの自己紹介を終えたあと、「聞くことと考えること」を重視する福笑いをすることによりみんなの緊張という壁はなくなりました。どのグループを見ても素敵な笑顔がはじけていて、実行委員達の場を和ませる才能には非常に驚き感動したのを今でも鮮明に覚えています。お昼ごはんを済ませたあとはバスに乗り宿泊施設へ。バスの中でも眠気に打ち勝つくらいの魅力溢れる面白いバスレクを楽しませていただきました。宿泊施設に着き一通り説明を受けた後はみんなで海洋博物館と海へ。日本人同士でかたまることなく、外国人参加者を上手く会話に引き込み楽しませている姿に惚れ惚れしました。

2日目は日本における夏の必須アイテムであるうちわ作り体験をしました。それぞれが思い描くデザインは、どれも素敵で　1つ1つが輝いていました。みんなで集合写真を撮ったあとは、鍾乳洞へ。わたし自身初めて行ったのですが、少しひんやりしていて　それでいて独特の雰囲気や歴史を感じさせる鍾乳洞。多くの人にとって新鮮だったと思います。鍾乳洞を散策し終わったあとは、おみくじを引いたり　河原で遊んだり　談笑したりと有意義な時間を過ごしました。

そしてついに迎えた最終日。朝は書道と絵葉書作りをしたりと「書く」日本文化を体験しました。自国以外の国の文字を書くことは容易ではなかったと思いますが、協力し合って字を完成させるというアイデアは本当に素晴らしいものでした。それから岡山で有名な美観地区でミッションゲームをしました。広い観光地ではないですが、各グループでミッションをクリアするために会話を通して様々な所を歩き、面白い写真を撮ったり、美味しい食べ物を食べたり…と五感を全て使うことができるミッションゲームでした。楽しいと感じれば感じるほど時が過ぎるのはあっという間で…気付けばフェアエルパーティ会場へ足を運んでいました。そこではサプライズでこの三日間のムービーを鑑賞したり、外国人参加者へアルバムを贈ったりと感動の連続でした。私もこの三日間が本当に楽しくて、終わってしまうのが信じられませんでした。それほど実行委員達が提供してくれたものは充実していて、心が満たされるものとなったはずです。この度は本当にかけがけのない貴重な時間をくださり、ありがとうございました。

《日程》

8 月 25 日：ウェルカムパーティー、渋川（宿泊企画）

8 月 26 日：井倉洞、夢すき公園

8 月 27 日：ノートルダム清心女子大学、美観地区、フェアウェルパーティー

九州支部　総括

実行委員長　木内理賀

今年の九州 ST の参加者はインドネシア、ベトナムから計 3 人海外参加者を招いて行われました。事前のキャンセルなどが重なり、他支部の参加者が思ったより集まらなかったのですが、その分濃い時間を共にできたと思います。

一日目はスポーツ大会を行いました。初日は他支部の参加者が 2 名ということもあり、うまく仲を深められるか心配でしたが、全国合宿で事前に友達になっていた子がいたので、スムーズに進めることが出来たと思うのと、実行委員のみんなが協力してくれたことが大きかったです。二日目と三日目は他支部の参加者も増え、九州支部からの参加者も増たため、うまくみんなを統率出来るかが心配でした。バスの出発時間を前日までずっと迷っていて、どうなるかや、下見で行ったことのないルートもあったり、荷物の問題など不安材料はたくさんありました。当日になり、予想もしていなかった問題もありましたがどうにかみんなでカバーしあえたことが良かったことだと思いました。バスの時間は思ったより早く着き一本前のフェリーの乗れる時間に着いたときも臨機応変にみんなが役割分担して動け、一本前のフェリーにも乗ることが出来ました。その後も宿泊先の協力もあってうまく進めたと思います。ただ少し天気が悪かったのが残念でした。海での時間も予定より早くしてもらうことが出来てよかったです。そして夕食、花火、飲み会と続きました。花火は風が強くて思ったようにはできなかったのですがみんなが楽しそうにしてくれていたのでうれしかったです。そして飲み会では海外参加者、他支部参加者のみんなが関係なく仲良くなることが出来たと思うのでよかったと思います。三日目は体験と観光に行きました。体験では絵付け体験をし、観光では日本の文化を知るいい機会になったと思います。最後の見送りでは「ありがとう。もし私の国に来ることがあれば今度は私が案内するね」といわれたことがうれしかったです。

私は九州 ST のオガチをして本当によかったと思います。最初の頃は本当に不安な気持ちで始めたオガチで人前に立ち、自分が率先することなんて今までの私なら考えられなかったからです。でも私がするしかない、引っ張っていくのは私だと実感したことによって少しずつ変わっていけたと思います。当日になるまで不安で押しつぶされそうな ST も終わってみるととてもさみしく感じたとともに、大きな達成感と自信を得ることが出来ました。頼りない私を支えてくれたみんな、励ましてくれた人たちにありがとうと伝えたいです。

九州事前研修旅行参加者の声

中村有香

① 一日目

　　他支部からの参加者は名古屋からの私たちのみで、最初は少し疎外感がありましたが、九州支部の方はコミだけでなく参加者の方々も皆親切だったので、楽しめました。スポーツ大会は、運動が苦手な私でも楽しむことができたので、よかったです。夜に一回生と外国人参加者で晩御飯を一緒に食べられて嬉しかったし、仲良くなることができたと思います。

　ただ、他支部からの参加ということで、駅まで迎えに来ていただけたのは確かにありがたかったのですが、到着までの新幹線の時間の都合等もあるので、もう少し時間を詳細に教えていただけると、出発前の確認が簡単に済んだかなと思います。

② 二日目

　　天候が悪かったのが残念でしたが、海に入れて楽しかったです。カレーもおいしかったですし、手持ち花火も、少しハラハラする場面もありましたが、小学生以来やっていなかったので本当に楽しむことができました。

　二日目は名古屋以外からの参加者も増え、他支部の先輩方とお話する機会は少ないのでたくさんお話できてよかったです。

③ 三日目

　　絵付け体験や、能古島散策は名古屋ではできない福岡ならではの経験でした。天気もよく、空いた時間に能古島のジュースを飲んだり、花畑に行ったり、たくさん写真を撮ったりして本当に楽しかったです。

　　大宰府観光も本当に楽しくて、もっといろいろ見て回りたかったのですが、あっという間に時間が過ぎてしまい、残念でした。お土産は少ししか買えませんでしたが、おいしいものがたくさんあって幸せでした。

　　最後になりますが、九州支部のみなさん本当にありがとうございました。月並みな感想になってしまいますが、個人の旅行とは違う、大勢ならではの楽しさがありました。福岡といえば博多というイメージが強かったのですが、今回参加してみて新たな魅力を知れた気がします。三日間楽しかったです。他支部からの参加者ということで色々と気を遣わせてしまったと思いますが、本当にありがとうございました。

《日程》

8 月 25 日　開会式、手巻きずし、スポーツ大会

8 月 26 日　海水浴、カレー、花火、飲み会（福岡県能古島に宿泊）

8 月 27 日　絵付け、うどん、太宰府天満宮

第４章　本会議

全体総括

各分科会報告

分科会総括

各プログラム報告

全体総括

副実行委員長　才内麻里菜

第 62 回国際学生会議は『開かれた対話から実感する多様性～未来を創る私たちが今考えよう～』という総合テーマの下、9 日間という日程での開催となりました。活動の中心となる分科会に加え、日本文化体験や研修旅行、各種パーティーなどをプログラムに盛り込みました。また昨年度新しく始めたフィールドワークをいうプログラムを今年も引き続き行い、テーブルの枠を超えて異なる文化を持ち合わせる者同士がお互いを知る素敵な時間を創ることができました。全体として分科会ではしっかり議論し、その他プログラムでは十分楽しみ、メリハリのあるプログラム構成になったのではないかと思います。

本会議最終日を迎えるまでは参加者に本当に満足していただけているのか、などといった不安を抱えていました。実行委員が発足してから今日まで様々なことがありました。実行委員、参加者共々、楽しいことだけではなかったはずです。しかし、成果発表会終了後の達成感にあふれた表情、閉会式での参加者、実行委員の涙、たくさんの笑顔を見ることができました。また、本会議が終了した後にも続く参加者、実行委員の交流を見ていても、ここまでやってきたことの意義を強く感じています。

副実行委員長として至らぬ点も多々あったと思いますが、今年度の反省を踏まえ、今後の国際学生会議がより良いものになるよう、一層努力してまいります。

最後になりましたが、第 62 回国際学生会議を無事閉会することができたのは、本会議のみならず、企画段階から御理解、御支援、御協力いただいたすべての方のおかげです、さらに今回は、昨年以上の企業、個人の方々からの御支援がありました、また、国際学生会議のみならず、国内には学生が運営する多くの学生会議団体が存在し、合同で説明会を開催するなど、互いの活動の質を高めることができ、この国際学生会議がどれだけ沢山の方の支援を受け、ここまで続いてきたのかを改めて実感いたしました。61 回続いてきたこの国際学生会議の 62 回目に副実行委員長として関わることができたこと、参加者や御協力いただいた沢山の方に出会えたことに感謝しますと共に、第 62 回国際学生会議に関わって下さった皆様に、心から御礼申し上げます。

以上を全体総括とさせていただきます。ありがとうございました。

テーブルⅠ

ユース世代の難民問題
～教育・経済的視点からのアプローチ～

テーブルチーフ　山本昂亮

①議論の背景

私が本会議において選択したテーマは「難民問題」についてでした。この選択の背景には２つの理由があります。１つ目は大学において専攻している分野が難民問題についてであること。もう一つはこのトピックについて他の人がどう考えているのか、またはどのような観点からどういった取り組みを行っているのかについて知りたいと考えたからです。大学の授業や文献などで学んだり、調査をしたりしているだけでは、世界的に話題になっているこの話題について他の人がどのような意見を持っているかが分かりません。また、海外の国々では日本とは全く違った難民にまつわる事情を抱えています。したがって違う国に暮らす学生から直接その国の状況を聞くことによりテーブルの参加者はもちろんのこと自分も見識を広げられるのではないかという期待がありました。

さらにこのテーブルでは３つの特徴がありました。１つ目は議論の対象をユース世代にしたこと、次に観点を教育・経済的なものにしたこと（ただし、経済については具体的にお金を動かして何かアプローチをすることは学生として非現実的と考え、教育の延長線上にあるものとして認識をしました。したがって、このテーブルで主に触れたのは教育です。)、最後は議論して終わるだけでなく本会議が終了した後に何かしらの取り組みを行うことを想定して議論を進めていくことです。それでは一つ目から説明をしていきます。

１つ目のユース世代に絞った理由としては、私が前々からユースについては国際的な支援が届きにくいと聞いており問題意識があったこと。また、私たちと同世代であることから教育という要素が絡んできているために私たちにとっても意見が出しやすく話が進みやすいのではないかと考えたからです。

２つ目は教育的な視点に絞ったことです。やはり教育は１つ目の理由のところにも書きましたが、ユース世代の問題を考える上では必ず触れなければいけない要素です。ただ、後述いたしますが本会議の議論を通して出た結論は難民に対する教育というよりは日本人が難民に対して理解を深めるための教育的な方法を考えたという形になりました。

３つ目は３点の特徴の中でも最も私が重視したものです。それは実践です。議論をすることが主目的の ISC ではありますが、せっかく議論をしてもそれを実際に形にしていかないともったいないという印象を私は抱いていました。そのため、議論の方向性も実践を想定したものになりました。

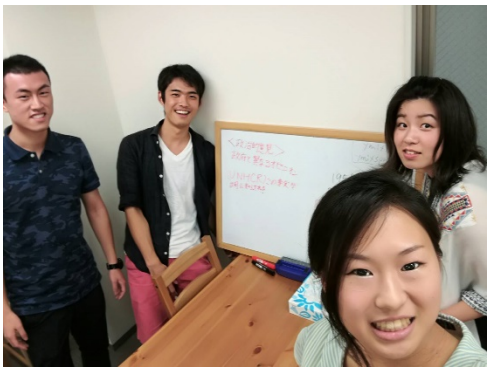
②議論の具体的内容

このテーブルにおいてまず決めなければいけなかったのは誰を議論の対象とするかでした。難民という言葉はとても広いため、議論の対象を絞り込む必要性がありました。そこで、私たちが注目をしたのが「インドシナ難民の 2 世世代」でした。そうして対象を決めたのち、彼ら彼女らの生活実態を文献やインターネットを用いて調べ克服すべき問題をリストアップしました。さらに、その問題の背景にあるものは何かを話し合い、実際にどういった取り組みを行えばいいのかについて議論しました。取り組みを考えるときにはそれをやって本当に意味があるのか、なんのためにやるのか、果たしてそれは現実的なものかといった点に注意しながら様々な案を出し取捨選択を行いました。

③事前活動内容

具体的には国内参加者の勉強会を 1 回と、海外参加者に向けては私が個人でスカイプをして、議論の方向性などを報告・相談するといった内容で行いました。また、個人的な活動としてはテーブルテーマについて石田寛様（経済人コー円卓会議日本委員会)、綿貫雅一様（日本グローバル・イニシアティブ協会)、松本悟様（法政大学国際文化学部教授）からアドバイスをいただきました。

〈事前勉強会〉



勉強会は 7 月 31 日(日)14:00~17:00 の日程で渋谷にて行いました。国内参加者のみの参加でした。そのときには難民について書かれた専門的な文献を事前にコピーし、参加者に担当を振り分けて該当範囲を読んでシェアするという形をとりました。調べたことは以下の通りです。「難民問題の歴史・国際的支援の歴史」「難民の定義」「難民の持つ権利」「難民に関わる法律の整理」「日本の難民認定制度」です。まとめると、難民に関わる法的な視点が多く入っていた内容でした。私たちのテーマに直接は関連していませんが、まず難民問題にかかわるこうした基本的な知識が入っていないと何一つ議論が進まないと考えこのテーマを選択いたしました。

〈海外参加者とのスカイプ〉

海外参加者とは私と 1 対 1 でのスカイプを行い、今どのようにテーブルテーマを考えているのか、またそれについて何かしら意見や質問があるかについて話し合いをしました。

④分科会内容

◆　分科会１　【議論のテーマ決め】

まず、最初の分科会ではメンバー全員でこのテーブルが何を話し合い、何をゴールとするのかについて議論しました。その結果、本会議を通してインドシナ難民として日本に来た人の2世の生活実態を調べて彼らにまつわる問題をいくつか抽出し、その背景にあるものは何かを探ることにしました。海外参加者のことも考えると議論の対象を日本国内に絞るのは個人的には憚られましたが、私の予想とは裏腹に簡単に承諾してくれたので時間を要することもなく決めることができました。私がこの作業をしたのは2つの意味があります。1つ目はメンバーによって議論の方向性についての理解に差があると感じていたからです。事前に私の方からテーマは伝えてはいましたがテーブル全体で顔を合わせたことはなく、すべてのメンバーが私の目標は何かが完全に理解しきれているとはいえない状況でした。2つ目はこの議論の大義名分を作るためです。堅い表現になりましたが、つまり私たちは何を目指していてなぜこのことを今話あっているのかということを全員が理解できるようにするということです。それがなければ議論に参加していてもあまり面白くなくなってしまいモチベーションも下がることは間違いないです。これらの作業を通して全員が理解することができ、最初の滑り出しとしてはうまくいったと考えています。

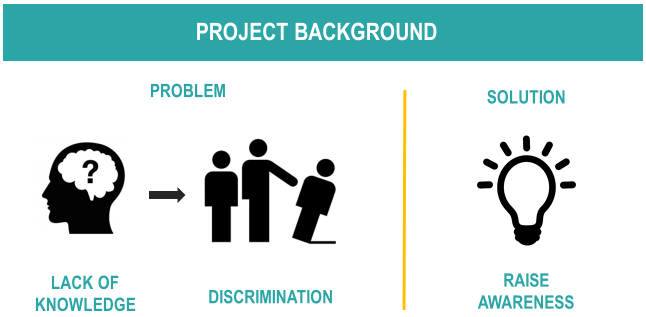
◆　分科会２　【問題の特定】

この分科会ではインドシナ難民の2世世代の人がどのぐらいいてどういった問題を抱えているのかということを話し合いました。しかし、ここで一つ壁が生じました。それは知識不足です。これは私も事前から若干心配していたことではありましたが、当たり前のことながら知識がなければ清算的な議論をすることは出来ません。そのため、この時間をつかってリサーチをすることに決めました。日本語・英語で書かれた文献やインターネット上の論文を参考にして彼ら/彼女らについての情報を得ることに努めました。その結果2つの大きな問題があることが分かりました。1つは語学力の問題です。日本語を会話の中では普通に話すことが出来ても、テストではいい点数が取れないといったことが生じています。2つ目は差別の問題です。2世世代は日本で生まれてはいますが、日本人の子どもとは生活習慣が違う場合がありそのことが原因でいじめを受けたりするということがあります。こうした2つの問題をもとに解決策を探っていくことにしました。

まず言語の問題に取り組みました。私たちの目標は何かしらのアクションを起こすということでしたので、具体的な取り組みとして考えられるものを挙げていきました。しかし、すでにたくさんのNGO団体が日本語教室を行っていたり教材を作成したりしています。加えて私たちのオリジナリティーがそこにはないということを感じました。議論も行き詰まりを見せ、これ以上の進展は見込めないことから今まで考えてきたことをすべて捨てて差別の問題に取り組むことに決めました。

差別の問題では何が起こっているのかはリサーチでわかっていたので、取り組みを考える前にどうして差別が起こるのかについて話し合いをしました。その結果周り（ここでいうと日

本人）のインドシナ難民に対する知識不足というのは否めない、すなわちこれが原因ではないのかという結論にたどり着きました。しかし、この時間内だけでは具体的な取り組みを考えることは出来ずその作業は翌日に譲ることにしました。



◆　分科会３　【取り組みを考える】

前日に具体的な取り組みを考えることが出来なかったので、この分科会を使ってどういった取り組みが考えられるのかについて考えました。ただ、まだ分科会３の段階ですのでそこまで深く詰めるというものではなく案をとにかく出していくということに専念しました。その結果主に２つの案が出ました。１つは難民の方を取材してその記事をネットで配信するという案。もう一つは難民問題に関する簡単なアニメーションを使ったビデオを作成して YouTube などに投稿するという案でした。しかし、どちらの案も発想は面白かったのですが現実味にかけるなど決定打を欠く内容になりました。しかし、分科会６で難民の人が来てくださることになっていたので案を見せてコメントをいただきたいとの思いから候補として残すという段階にとどめました。

◆　分科会４　【プレゼンテーション分析】

この分科会は外出企画のあと、夜だったということもあり本テーマである難民から離れてサマリーを見据えてプレゼンテーションについて話し合いました。具体的には魅力あるプレゼンテーションを作るためにはどのような要素が必要になってくるかについてブレインストーミングをしました。作業を中心とした方法で行い、具体的にはメンバーを２つのグループに分け模造紙に書き出していくというものでした。特別知識がなくてもできる作業ながら重要なことでもあるのでこの過程は欠かせないものだったと考えています。はきはきとしゃべる、感情をこめてプレゼンをするなど非常にたくさんの要素があがりました。その後にたくさんの候補の中からサマリーのプレゼンにおいて特に私たちが重視したい項目をいくつかピックアップして自分たちの指標作りをしました。この作業は意見の衝突もありながら終始ボルテージの高いまま行うことができ、翌日に向けてもよいディスカッションだったと考えています。

◆　分科会５　【プレゼンテーション練習】

この分科会は個人的には一番失敗してしまったという印象があります。失敗談として読んでいただければと思います。まず何をしたかについて話すと前日の夜に作成したプレゼンテーションの指標をもとに実際にプレゼンの練習を行いました。サマリー前の練習だけでは足りないだろうと思い一種のリハーサルの気持ちがありました。グループを３つに分け、「インドシナ難民とはどういう人か？」（インドシナ難民発生の背景を歴史的に見る）、「日本におけるインドシナ難民の受け入れ」（日本がどのように彼ら/彼女らを受け入れてきたのかを政策的な面から見る）、「世界のインドシナ難民問題に対する取り組み」（世界的にはどのような受け入れ態勢をとったの

かを歴史的に見る）というテーマで各班にテーマを振り分けました。それぞれ10分間でプレゼンを行うことを想定して作業に取り掛かってもらいました。そして発表を他の班員に見てもらいコメントをしてもらうという流れです。しかし、これは私の想像以上にハードなタスクでした。では、何が失敗だったかについて述べていきたいと思います。

1つ目の失敗はタイムマネージメントです。もともと私の想定では1時間で調べスライドを作成し、さらには練習をしてプレゼンを行うというスケジュールで組んでいました。ところがいざやってみると班によってはテーマが難しく（特に最後の世界的な取り組みを調べた班はテーマが広すぎたためにリサーチが難しかった)、とても1時間では足りないということが起こりました。その一方で1時間以内に終わることが出来た班もありその班をあまり長く待たせるということをしたくなかったために、あまり準備が出来ていない段階の班も半ば無理矢理発表させてしまいました。その結果スライドは出来ていない、練習はほとんどできていないという状態になり昨日作った指標も全く意味のないものになってしまいました。また、プレゼン練習は分科会5だけど終わらせるつもりでしたが分科会6の時間も使うことになりました。

2つ目は私がプレゼンの班に入ったことです。今までの分科会は比較的議論を外から客観的に見るということに終始していたため、一度議論に入ってみることも大切だと考えインドシナ難民の世界的な受け入れを調べた班に入りプレゼン作成を行いました。しかし、私はタイムマネージメントや他の班の進行状況を見ることも同時に行わなければならず実質としてほとんどコミットできずにかえって同じ班員を困らせるということになりました。ですので、もし議論に入る場合は他のことと同時に物事を見ることがしっかりできないといけません。そういった意味でリスキーなことだと感じました。

テーマ設定の際にはカジュアルなテーマにすることも考えましたが、あまり時間のない中で関係のないテーマをすると時間が無駄になってしまうのではないかと考えてこれら3つを選択しました。しかし、これはカジュアルなものでもよかったのかもしれません。そんな中でも一つ収穫だったのはサマリーのスライドを作っていた時にこのプレゼン練習で使ったデータを使うことが出来たということです。つまり、その時間で探さなくてもすぐにあの時のデータがあるとすぐに使えたことは収穫だったと考えています。

◆　分科会6　【当事者からの話・意見を聞く】

ここでは実際に難民の方に議論に来ていただいてお話しをしてもらうということをしました。(なお、その方のプライバシーの問題があるため名前など具体的な情報については触れません。）事前にその方とお会いして打ち合わせを行い、この本会議で目指す内容についてお話しをしていました。難民の方には自分の生い立ちやどうして日本に来たのか、そして日本にきてからの生活で困ったことや家族が受けた差別などをお話ししていただきました。もう一つは事前に考えた難民の方に対してできると思われるプロジェクト案にコメントをいただくということもしてもらいました。

実際に当事者の方からお話しを聞く機会というのはそんなに多くなくメンバーにとっても私にとっても気づかない点がたくさんあり、多くの気づきを得る機会となりました。また、プ

ロジェクト案についてもたくさんのコメントをいただきました。そこには難民の方からしか出ない指摘もあり私たちの無理解な部分も発見できたと考えています。

◆　分科会 7～9　【プロジェクト案の決定】

ST 後の分科会はこの議論の最も核心的な部分であるプロジェクト案を決めて具体的に固めるという時間にあてました。

まず、7 においては難民の方のお話しの振り返りをして自分たちのプロジェクトは本当にこれでいいのかについてもう一度検討しました。さらに、プロジェクトを作る際にどういう要素を考慮しなければいけないのかという指標作りをしました。この点については分科会 4 で行ったプレゼンテーションの指標作りと似たような作業でした。

次に 8 ではその指標をもとに取り組みを考え、結果としてトークショーを行うという選択肢が最も良いのではないかという結論にたどり着きました。アプローチの仕方が決定したのでその後には「なんのためにやるのか？」「このイベントの方向性は？」「どんなイベントにしていきたいのか？」などイベントの核になる部分を話しあいました。また、具体的なコンテンツについてもブレインストーミングの形で意見を出し合いました。

9 でも同じ作業を行いました。もともとこの分科会からプレゼンテーション作成を開始する予定でしたがもっと内容をつめることがより重要だと考え、その作業は翌日に譲ることにしました。

◆　分科会 10　【プレゼンテーション作成&練習】

いよいよサマリーまで残り 1 日。この段階になってプレゼンテーションの作成を開始しました。

まず 10 ではプレゼンの流れを組み立てる作業をしました。それが終わるとプレゼンターは全部で 4 人いたので全体を 4 つに分けて担当箇所を決めました。その担当箇所に基づきプレゼンをしない 4 人と組んでもらい 2 人ずつのグループを 4 つ作って各グループの作業となりました。

11 では続きをやりながら、同時にサマリーで聞かれるであろう質問を想定してその答えを用意するという作業も行いました。これにはすべてのメンバーが携わったわけでありませんでしたが、非常に意味のある作業でした。この作業により、サマリーで質問を受けたときにもこたえにそこまで詰まることもなくスムーズに答えることが出来ていたように感じます。

12 では部屋に備え付けてあったプロジェクターを用いて徹底的に練習をしました。その時になってようやくプレゼンテーションの指標が役に立ちました。

⑤個人所感

本会議でサマリーに向けたプレゼンを作っていくというのは家を作る作業に似ていると感じています。そしてサマリーという場は自分たちが作った家をクライアントであるお客さんに

披露する場であるようにも感じます。

家を作るのに必要なのは建築士と大工です。建築士はまずどんな家を作りたいのかというビジョンを立てます。それをもとに設計図を作成して大工の人と相談しながら家を作っていきます。その途中には意見を衝突があるのも事実です。最後には完成した家をクライアントに見せて満足してもらうものにするというのが一連の流れです。

この過程を ISC の流れに例えるならば、テーブルチーフは建築士、参加者は大工です。（決して上から目線のものの言い方をしているわけではないので誤解をしないでください。）テーブルチーフはまずはビジョンを示さなければいけません。どういう議論をしたいのか、何を明らかにしていきたいのかといったものです。その後に説明会や web での広報を通して議論を共に作っていく参加者を探します。選んだうえでともに議論の作成に入ります。そしてサマリーの時にお客さんに見せて十分に満足してもらえるような議論を作っていきます。

この時に忘れてほしくないことが 3 つあります。1 つ目は「自分たちが楽しむことも忘れない」ということです。私の先ほどまでの家のたとえだとお客さんに満足してもらうことが一番のようにも見えますが、自分たちのビジョンをしっかりと持つことも大切です。客受けばかりを狙う必要はそんなになく、要するに大切なことは本会議を通して自分たちがどう成長するのかということです。また、お客さんの満足の前に自分たちが満足をしなければ話が始まりません。支離滅裂になってしまっては聞いている側も意味が分からないので、論理性は必要ですが自分たちが楽しむという姿勢は忘れないでください。

2 つ目に、資料集めは出来るだけするということです。家を作る際にもそもそも材料がなければできません。その材料集めをする時期は本会議が始まるまでです。始まってからでもできますが、急速に集めた材料ではグラグラなものができてしまう可能性があります。資料はなるべく多く持っていて損はしないので時間をかけてたくさん集めてください。

3 つ目はテーブルチーフをやる人に特に重要なこととして主張したいです。それは完璧主義にならないことです。どうしても本会議が始まると途中で予定通りにはいかなくなることがあります。その時に、予定と違っていることをそこまで心配しないでください。1 回や 2 回ぐらいの失敗は挽回できるし、私自身も予定通りいった分科会などほとんどありませんでした。だから、準備はしておくのは大事ですが途中で壊してもいいぐらいの気持ちを持って本会議に臨んでください。精神を病んでしまうことが最悪の事態なのでこの点は強く強調したいです。

テーブルチーフは大変ではありますが、自分の好きなことが出来るという点では他のどの役職よりも優れています。「思いっきりわがままになって好きなことをやってください。」というのをメッセージとして終わりたいと思います

テーブルⅡ

教育による幸福の実現可能性
～多様な地域と人に根ざした社会の在り方～

テーブルチーフ　瀬戸口舞

①議論の背景

世界的には宗教差別などによるテロ事件、国内では、少年の凶悪犯罪が相次いで問題となっています。その一つのとなる背景には、ライフスタイルの近代化により、核家族化が増え、コミュニティーとの関係性が希薄になっていることが挙げられます。人口３万人程の町から上京して感じた私自身の経験ですが、故郷を離れて社会とのつながりや、コミュニティーの温かさがその土地で生きていく上で重要な心の安堵となることを改めて実感しました。

見えない偏見や差別による壁で、世間から隔離され、孤立してしまっている人の姿を見るとやるせない思いになります。コミュニティーから疎外されてしまう原因はさまざまですが、いわゆるマイノリティーという集団にとっての生きづらさを作り出しているのは、社会の側にあって、彼らの存在にあるのではない。この考えをもとに、差別や偏見をなくし、フラットな心持で人と接することを目標として、教育現場から変えていくことができないかと思い、今回のテーマを設定いたしました。少々抽象的な文言を使っていますが、国際学生会議という世界各国から集まる学生と議論をするに適切なテーマとして、焦点を当てて議論したインクルーシブ教育の議題は、私自身が数年前にインターンをした教育事業を行う企業での経験が原点でもあります。

②議論の具体的展開

国際学生会議（ISC）の委員会会議では、障害者教育の形態の一つであるインクルーシブ教育の有用性と限界についての議題を提出していました。しかし、「障害者教育自体が参加者の国々で行われているのか」、「そもそも議題自体が成立するのか」という疑念を詳細に浴びることから始まりました。ISC の参加が初めてだった私は、参加経験のあるメンバーのアドバイスを文字通り、否定的に受け止めました。今一度、ISC で話すべき議題とは何かを考え直し、幅広い教育の議論を扱うことにし、説明会やテーブル紹介の動画などでは教育学や心理学で扱われている様々な研究を提示しています。

その結果、アプリケーションフォームでは様々な教育分野に関心のある参加者が集まることになりました。ここからが葛藤の始まりです。幅広い議題であるため、収集をつけなければ議論になりません。議論の幅を狭めていくために、まずは参加者との 1 対 1 のコミュニケーションを大切にしました。選考を通じて、各人がなぜ教育に関心があるのかという熱意やきっかけ、また幅広い議題に対して各々が考えていること、ISC の本会議の末に獲得したいことは何かを聞き取るこ

とから始めました。

③事前活動内容

メンバーが決定次第、参加者同士が近い距離でコミュニケーションが取れるように、SNS でグループを作りました。自己紹介や各自が議論したい内容を共有する場として提供しました。

〈参加者招集会〉

国内参加者 4 名が対面する初日でした。今回は国外参加者 4 名中、3 人がテレビ電話にて会議に参加することが可能だったため、合計 7 人の参加者とテーブル 2 の議題について進めていきました。まずは、国内参加者で ISC にて話すべき議題は何かを列挙し、カテゴリーに分けて整理しました。その後に、各々が関心のある分野を共有し、共通認識をとることを目標に、国外参加者とテレビ通話で議論しました。

〈第 1・2 回事前勉強会〉

第 1 回目の勉強会では、参加者招集会にて、初めて海外参加者が何を考えているのかを国内参加者が知ることができたので、それを踏まえて今後の展開について検討しました。参加者は国内から 3 名で、事前に調べてきた、各々が持っている教育の関心ごとを共有しました。

第 2 回目の勉強会は、国内参加者 2 名が集まり、今までの議論とテーブルの議題について、ISC の OB であり、現在大学教授である先生にアドバイスをいただきました。ここでも、まだ議論の幅が広いため、狭めていったほうがより深い議論をすることができるであろうというご指摘とともに、教育におけるカテゴリーを提示していただきました。各々が考える教育についての、事例を整理するうえで重要なフレームワークとなりました。

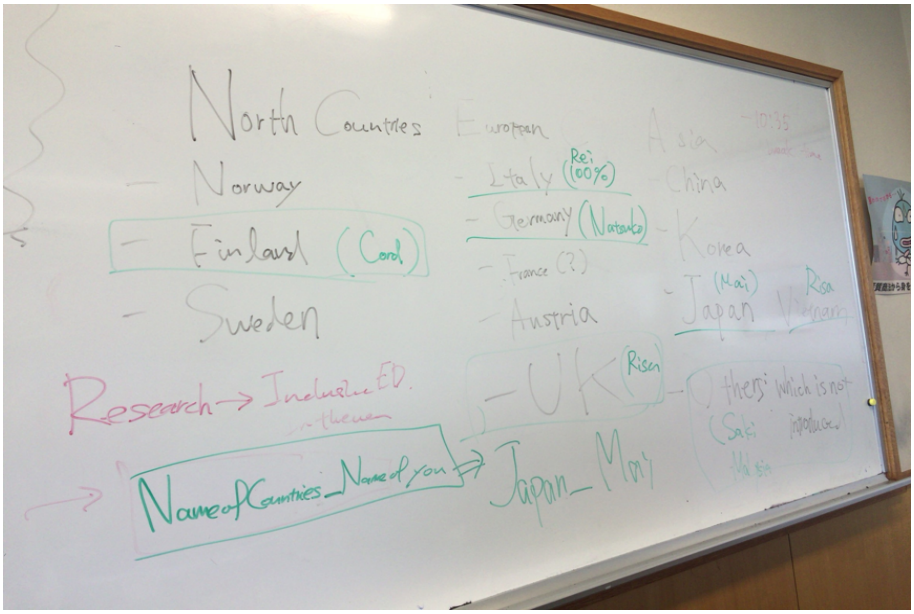
④分科会内容

◆　分科会１・２　【導入】

参加者招集会を経て約１か月間の進捗報告を兼ねて、今一度、個人が感じている教育に関する問題意識を共有しました。教育を受ける権利について、①インターネットのインフラを使った教育の機会の保障や、②子どもの労働問題、性的マイノリティー、③インクルーシブ教育、④教員の質の問題など様々なイシューが出てきました。

◆　分科会３・４　【テーブルの方向性を選定】

２回の分科会を経て、テーブルの方向性を決めるために、各自問題点についてリサーチ＆発表する時間を設け、テーブル２として議論するべき範囲について考えました。２人１組に分かれ、合計４つのプレゼンテーションを行いました。４回目の分科会で、テーブルとしての軸を改めて考え直しました。私たちのテーブルではダイナミックな展開を重視した結果、４グループが発表した内容のうち、①障害者教育の指導形態、②指導力の差の問題、③インターネットを使った教育の機会の保障、３つのテーマに分類をしてテーブル２の議題にしました。



◆　分科会５・６　【テーマのリサーチ&共有】

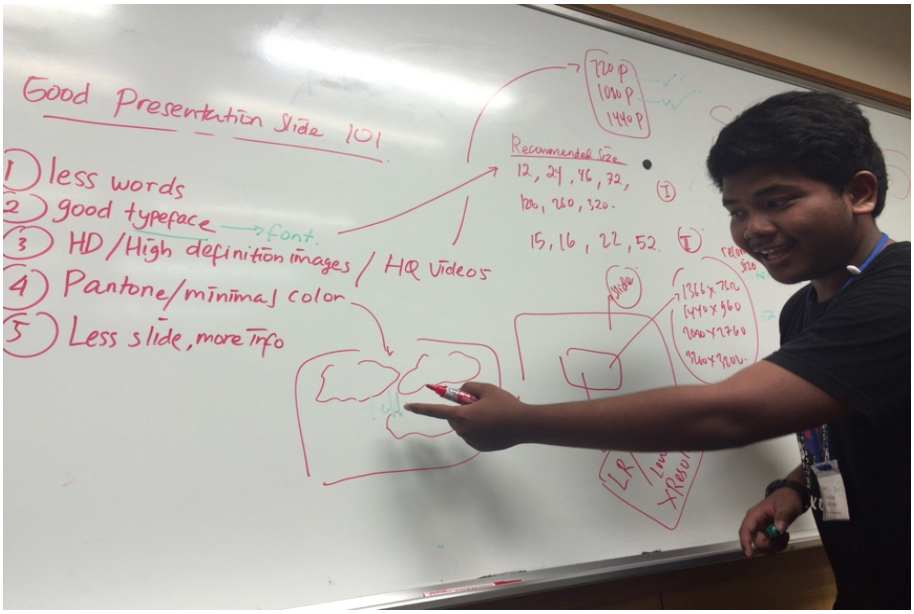
４回目の分科会で決めた教育問題のうち、①障害者教育の指導形態について、イタリア、フィンランド、ベトナム３か国を選び、その国の施策、指導形態、教員の指導補助、その地域の特徴という４点から、リサーチをして共有しました。世界で先駆けて、法律にてインクルーシブ教育の施策制定を行ったイタリアが現在でも、効果的な指導形態を行っているという主張から、フィンランドの指導形態を見ると先生の数の面からは十分に行き届いているという、様々な視点での主張が出ました。

◆　分科会 7・8　【発表スライドのフローに従ってリサーチ&共有】

発表するスライドのフローを作り、リサーチの内容を共有。7 分間の発表で今まで議論したすべてをカバーすることは難しいと判断したため、障害者教育のインクルーシブ教育に焦点をあてアウトラインを作成。①テーマ設定理由、②国連における障害者の権利保障、③各国の施策、④解決策というアウトラインでスライドを作成しました。

◆　分科会 9～12　【プレゼンテーション資料の作成&リハーサル】

プレゼンテーション原稿の作成、スライドのブラッシュアップ、リハーサルを行いました。発表の準備の時間が十分に取れたため、スライドのブラッシュアップのところでは、自作の映像を使ったプレゼンテーションを行いました。



⑤個人所感

アジア各国からの学生が日本に集い、1週間ほどの会議ができる機会を与えてくださった皆様に感謝の意を表したいと思います。共生社会を築くための教育というテーマに、たくさんの方々から応募をいただき、皆様とテレビ電話を通して、教育をテーマに議論ができたことを光栄に思います。皆様と本会議の場で議論することはできませんでしたが、選抜された8名のメンバー全員が本会議に参加し、成果発表会を無事に終えることができました。短いようで、長かった半年間の仕事が終わり今は、正直に肩の荷が下りた気持ちです。

さて、テーブルチーフとして今回のテーブル2の議論に関しての成功点と反省点について記述させていただきます。まずはテーブル2の発表内容にもある通り、私たちのテーブルは、ダイナミクスを重視した発表となっています。教育の格差、アクセサビリティーというお題に対して、インターネットを利用したプロジェクトの事例など、参加者の強みが生かせる議論を行うことができました。一方で、複数ある反省点のなかでも、テーブルチーフとして参加者の教育に関する知識を増やしていくとともに、議論をより充実させることができたのではないかと考えています。右も左もわからない状態で、約7日間行われる会議のリーダーを務めることは初めての経験で、テーマ設定してから参加者に詳細を伝えていくがもっとできたのではないかと感じています。次回のテーブルチーフとなる方にもお話しする内容にはなりますが、テーブルチーフが設定したテーマに疑心暗鬼になっていてはいけません。行き詰ってしまうことが何度かありましたが、発信することをやめてしまっては先に進めません。受け止めてくれる参加者、サポコミとともに議題を深めていくことが重要であることに気づきました。

国際学生会議にて、テーブルチーフとしての力量だけではなく、人生の糧となる経験ができたことを誇りに思います。この夏に出会ったISCのメンバーにも感謝の気持ちでいっぱいです。

テーブルⅢ

人道的介入
～「地球市民」の限界と可能性～

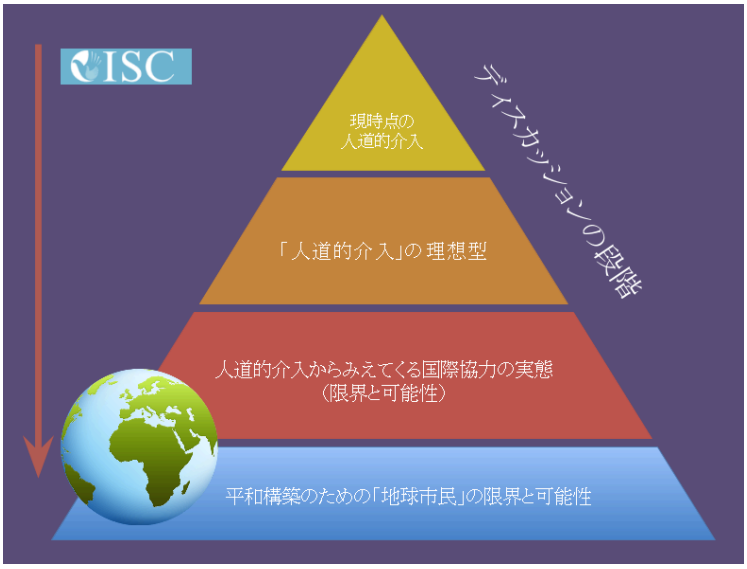
テーブルチーフ　奥山杏子

①議論の背景

今の学生は小学性の英語教育を始めにグローバリゼーションによる日本への波紋を意識して育てられてきた世代であると言っても過言ではないと思います。変わりゆく世界の中で取り残されないために私たちの世代で「グローバルな人材育成」を始め、学生は世界に目を向けてきました。共通の惑星に暮らす市民―地球市民とはどのような人なのか。そのような「地球市民」について今、学生の立場から探求するべきだと思います。そのような大きな問いを掲げながら、議論を進めるためには一つの切り口が必要です。そこで思い浮かんだのが国家間協力の形です。現在は個々人の集結した国家が世界を分けて統治しています。そのような国家があるグローバルな世界はどのように国際的な問題を解決していくのか、そして国家に守られなくなってしまった人々を守るべきなのか。守るべきであるのならば、どのように守ればいいのか。人道的介入という専門的に聞こえる単語を扱いながらもその単語はまだ発明されてからも数十年、柔軟な定義を持つ「人道的介入」を扱うことによって学生の身分である地球市民がどのように平和に協力できるのか、テーマとして選定しました。

②議論の具体的展開

地球市民の姿勢を見つけるために人道的介入というテーマの切り口を設定したのにもかかわらず、最初に人道的介入というテーマについてリサーチを始めるのに戸惑いました。それは様々な異なる人道的介入の定義を掲げる専門家の書籍を読むにあたってケース・スタディを調べるのであれば複数件のすべてについて限られている時間で勉強することができないことにありました。そこでどのような事件を取り上げることが必要なのか決めます。広く浅く、時間の無駄のないように「人道的介入であった」という



参加者募集説明会での想定していた展開

事象を調べ、そこから参加者と共に私たち学生が取り上げる重要性を探ります。その評価基準は現在取り上げる必要性と学生の立場で何をできるのか当てはめやすい事件を選ぶことでした。したがって説明会で決めていたディスカッションの展開をたどる前にまず情報収集という厚い壁を通りました。そして、ケース・スタディに 1994 年のルワンダの虐殺と 1993 年のソマリアの内戦を取り上げることになりました。

２つの事件を比較するよりは、WHO, WHEN, HOW という３つの問いを各ケースで探りました。誰が介入したのか（しなかったのか)、いつ介入したのか、どのように介入したのか。現実を確認したのちに理想的には誰が、いつ、どのように介入すべきであったか話し合いました。このように現実を確認した上で私たちは理想的にはどう行えるのか、そして理想を話しながらも現実的にはどのような展開を想定できるのか探ることもありました。このような具体例をもとに話していると人道的介入の理想型が見えてきます。しかし、テーブルとして気づいたことはケースバイケースということであることです。人道的介入というのはあらゆる事件に当てはまるのでその事件に合わせて変化していくものです。それを理解した上で私たちは大まかな人道的介入の現実・理想と個人の立場からの国際協力を成果発表会で発表しました。

③事前活動の内容

参加者決定後、国内参加者は実際に集まって勉強会を実施します。海外参加者は濃くない参加者とペアを作り文献を読み意見交換を行ってもらいました。この時点ではテーマの理解を深めるのと同時にコミュニケーションを円滑にするための英語の表現や話しあう機会を設けました。

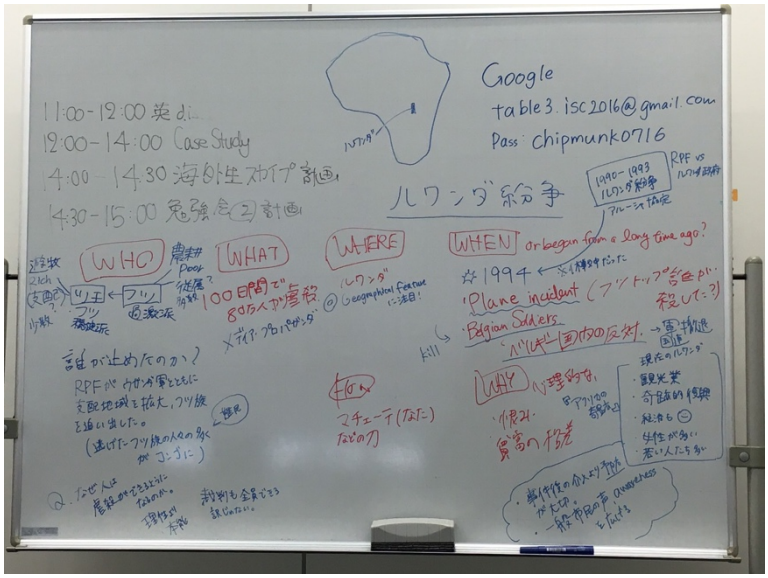
〈参加者招集会〉

参加者招集会とは国内参加者が今までネット上で連絡を取り合っていた参加者が初めて顔合わせをする場です。本会議に向けた個人的なゴールやテーブルとしてのゴールを再確認します。テーブルテーマ以外にも英語のディスカッションの練習として電子書籍、日本の就職制度など幅広い内容を扱って話し合いました。

〈事前勉強会〉

事前勉強会は合計２回—本会議前の準備として８月３日、16 日にどちらも１０：００～１５：００を目安に行いました。勉強会では参加者招集会に参加できなかった濃くない参加者を中心に英語のディスカッションの練習を行いました。取り上げたテーマはまたしもテーブルテーマとは無関連に身近なゴミの分別に政府が金銭的罰金を行うべきか、そして満員電車を減らすための政策を考えることでした。その後、テーブルテーマについてより知識を深めるためにリサーチを共にしました。英語の専門用語を使いなれるということも重要視ししながらも英語と日本語を混ぜながら勉強会を行いました。ケース・スタディとしてはルワンダの虐殺、１９７１年のインド・パキスタン戦争、コソボでの民族紛争でした。勉強会を通してテーマに対する知識を増やすことは限られ

た時間で大変ですが参加者の意見交換の場、そして英語でのコミュニケーションの成長を図ることはできました。



ルワンダ虐殺について情報整理

④分科会内容

◆　分科会１　【方針決定】

これからの１０日間をどのように有意義に過ごせるか参加者と一緒にディスカッションの具体的な計画を立てます。まずあまりにもディスカッションをするには情報が多すぎて、すべての参加者が同じ情報量を持つために現状をリサーチして知識の土台を作ることにしました。その後にまず人道的介入の今までの歴史をもとに定義をつけます。今までのケースをもとに定義をつけることにより、将来どのような介入が必要なのかディスカッションを行うこともできます。最終的には２つのケースに絞り理想と現実を発表することに同意しました。副題の「地球市民の限界と可能性」についてはこの時点ではまだたどり着かず、後々関係性について考えることになりました。

◆　分科会２・３　【現状リサーチ】

1990 年以降の人道的介入を取り上げて情報収集を行いました。限られた時間で効率的にリサーチをするためにパートナーになってもらい：ルワンダの虐殺、1993 年のソマリア内戦、コソボの民族紛争、カダフィー下のリビア、1992-5 年のボスニア・ヘルツェゴビナ、1991 年のクルド人に対する介入と現在進行中のイラク・シリアでの内戦を調べました。このリサーチを終えた後にプレゼンテーションにつかったポスターを一緒に写真を撮ったのが上の写真です。このプレゼンテーションで学んだ情報をもとに次の分科会の「人道的介入の現時点での定義」と取り組みます。

◆　分科会 4　【人道的介入の現時点での定義】

想定以上にこの定義づけに時間を費やしました。結果を最初に発表しますと私達はこのような定義にたどり着きました：

The use of military force into a state by intergovernmental organization such as NATO and the UN, when the state has failed to prevent widespread suffering or death among a substantial amount of its inhabitants from armed conflict.

『人道的介入とは国家が武力紛争による住民の広範囲に及ぶ苦痛と死を防ぐことができなかった場合に北大西洋条約機構(NATO)や国連のような政府間機関が行う軍事介入を意味する。』

誰が、いつ、どのように、という３つの問いを今までのケースをもとに当てはめるとこのような定義になりました。複数の事件をまとめて一つの定義に当てはめるのは困難なことです。言葉の微妙なニュアンスも考え、この定義はテーブルメンバーの努力の結晶です。

◆　分科会 5・6　【意見の再確認】

参加者がテーマについて抱いた疑問をこの時間で解消し、分科会のこれからのステップを考え直しました。参加者の中では最初から人道的介入は行うべきではないと考えている意見を持っている人もいて、このままのディスカッションの展開を予想していると自分の中のモヤモヤが消えないという悩みでした。

早い段階から人道的介入がいいものかどうか、という議論を行わず、人道的介入は行われるという前提で大半の参加者が議論を進めていました。現実的に考えるという方針を続けると理想的には介入のない世界について話し続けることは有意義ではないと話し合って結論を出して、もとのディスカッションの計画に戻りました。

◆　分科会 7・8　【Case Study : ソマリア】

分科会２・３の時点では７つのケース・スタディがあったのが、より深く現実と理想について話し合いするために２つにケースを絞りました。ソマリアとルワンダを選んだ理由には人道的介入の中でも特殊で対照的である二つの件であったからです。ルワンダの虐殺はあらゆる歴史家から介入をしなかったことについて批判されています。その反対にソマリアでは介入をしすぎたという批判があります。そのような対照的なケース・スタディを扱うことによって、二つの

ケースの間に存在する介入と介入をしないバランスを見つけようという考えで行いました。

ソマリアの事件では理想的にはこのように（右の図参照）国際組織は行動するべきであったという結論が出ました。

Ideal Humanitarian Intervention

Who	When	How
UN - Try not to include individual interest - Keep neutral position	- The president was kicked out - The civil war started - Large-scale starvation and disease started - No-armed force did not work	- Urgently use armed force - Protect soldiers and citizens

◆　分科会７・８　【Case Study：ルワンダ】

Ideal Humanitarian Intervention

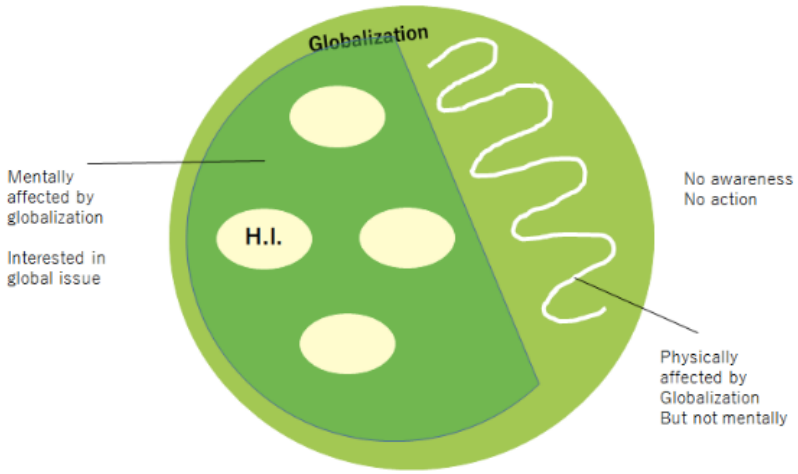
Who	When	How
UN Try not to include individual interest Keep neutral position	The airplane crash happened	Send more people in areas where human rights violations may occur

ルワンダの虐殺を取り上げている時にもソマリアのケースのように理想型を模索しました。やはりソマリアとは全く違う状況であり比較するのが難しいだろうという考えを証明されました。

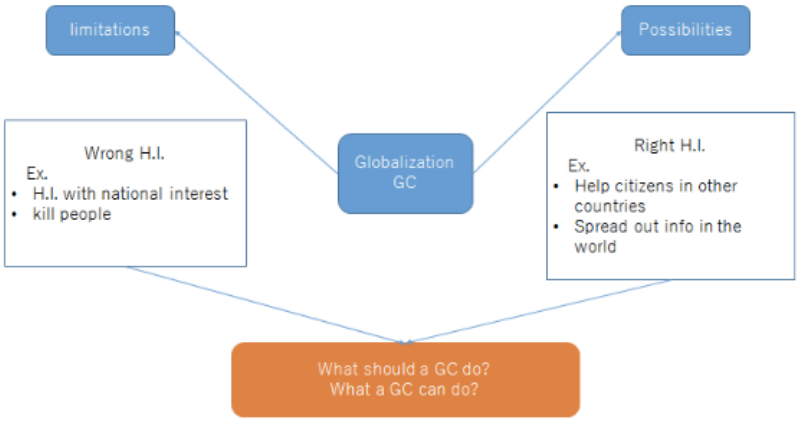
◆　分科会 9～12　【成果発表会準備】

大変なことにプレゼンテーションを準備する上で、成果発表会で設けられている１２分の時間では十分に私たちのテーマについてのディスカッション結果を深く伝えることはできないことに気づきました。従って私たちは観客に人道的介入をわかりやすく説明し個人が何をできるのかという「地球市民」を探求することを時間を踏まえて諦めました。しかし、これは観客に伝えることは難しいのかもしれないが個人的にテーブルメンバーとして話せたことには達成感を覚えました。

ここから議論は人道的介入(Humanitarian Intervention= HI)と地球市民(Global Citizen =GC)の関係性に発展していきました。その議論で話した内容の図が下にあります。



早い段階でまず地球市民とはどういう人なのか意見が異なりました。地球市民とは地球に住んでいる人すべてを表す！問いう考えと地球の中でもグローバル化に積極的に参加している人が地球市民だという見解で２極化しました。その２つ目の見解を説明しようとしてできた図では、黄緑のグローバル化という輪の中で積極的に関わっている人が濃い緑の丸の半分にいるということです。そして HI と書かれているのは積極的にグローバルな世界に貢献している人の極端な事例として存在するのではないかという考えが出ました。



ここでは新しく完全に現実を無視して理想を追求した見解が出てくることもありました。学生の立場から新しい見解が出るはずではあったものの、あまり議論は深まらず、人道的介入をする上では認識を高めるということを推奨することになりました。

⑤個人所感

国際学生会議に参加して個人としてどのように成長するのか改めて考えると、それは様々なバックグラウンドを持つ学生と話し合えることと議論に加わることによって学生として未来を想像して立ち向かうことができることだと思います。私が想定していなかったのは学生としての勉強に対する姿勢を考える場としての役目でした。このテーブルは学生なりの結論を出すのが困難なテーマでありながらも、「当たって砕けろ」精神で複雑なテーマを追求しました。専門家が何年もかけて考え出した結論を１０日間で出すことは不可能ですが、テーブルメンバー達は今出来る範囲で情報を収集して向き合おうとすることに意味があるのだと学生としての姿勢を教えてくれました。

そして意思疎通をしようとする本会議ではコミュニケーションについて学んだことがあります。それは意思疎通しようとする時に人はみんな違う「前提」を持っているかもしれないということを常に思っているべきだということです。その考えは異文化間だからというのではなく同じ母語、文化でもよくあることだと思います。人と話をする時にその人の立場に立とうとして

意見を聞くのは当たり前でありながら難しいことです。この意思疎通を追求する態度はコミュニケーションに置いて重要です。加えて、言語の難しさとそのツールを巧みに使うことの重要性を痛感しながらもそれ以外のコミュニケーションのツール、表情やジェスチャーの力を本会議では感じました。ディスカッションはただ情報の共有と意見の交換ではありません。共にテーブルで協力をするためには、言語によって伝わらない時でも体を使って感情や反応を伝えることによってこのテーブルは何回も救われたことがあると思います。このような学生としての姿勢、意思疎通を追求する態度、コミュニケーションにおける言語と身体での表現はこの会議が終了した今、将来にも役立つものだと思います。

テーブルⅣ

持続可能な社会と国際協力
～女性の人権から見る社会～

テーブルチーフ　丸山瑞稀

①議論の背景

『持続可能な社会(Sustainable Society)』という言葉を耳にしたことはありますか。おそらく多くの人が一度は耳にしたことがあるのではないでしょうか。これは、持続可能な開発が行われ、持続可能性を持った社会のことを指しています。持続可能な開発とは現代の世代が将来の世代の利益を充足する能力を損なわない範囲内で環境を利用し、要求を満たしていこうとする理念です。テーブル 4 では大きなテーマとしてこの持続可能な社会を据え議論を進めてきました。2015 年 9 月、ニューヨークの国連本部において「国連持続可能な開発サミット」が開催され、2015 年から 2030 年までに貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会など、持続可能な開発のための諸目標として SDGs(Sustainable Development Goals)が登場しました。その中で、私たちは今回のこの会議において述べられている目標 5「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」に注目しています。持続可能な社会の実現のための一つの要素である女性のエンパワーメント達成のためには、権力や声明よりも、価値観を越えたより多くの共感が必要なのではないでしょうか。女性のエンパワーメントの共感のハードルになっているものが何か、それを取り払う方法は何かを考えることは必ずしも専門的な知識を有していなければ出来ないものではなく、また ISC という様々な文化的背景を持つ学生同士で議論できる環境において有意義になるだろうと考えこのテーマを選定しました。

②議論の具体的展開

事前招集会の時点では参加者の間でなされているこのテーマを扱う理由となり得る問題意識の共通認識が均一性に欠けていました。私たちのテーブルテーマ自体の定義の曖昧さを払拭するためにまずは基本的な知識の補填をしました。招集会、事前勉強会を通しディスカッションプランを洗練することを念頭に置きながらの事前知識の勉強会、各々のミクロな生活で感じるジェンダーの不平等、問題意識の共有を進めていきました。本会議がはじまってからは全体の前提条件となる持続可能な社会の実現のために女性のエンパワーメントを推進するべきだという前提をよりわかりやすく多くの人に説得力のあるもの、難しい言葉をただ並べるのではなく私たちだから考えられる目線での前提の理由付けを行いました。テーマのキーワード、問題点、解決策の提案に至るまで全てケーススタディなどを通し分析等を行いました。持続可能な社会と女性のエンパワーメントの必要性が世界に浸透しているのか検討し直し、どのように女性の社会進出や地

位向上が促進されていけば持続可能な社会の実現に繋がるのかを議論しました。ケーススタディにおいてはこの国際学生会議の特色である異文化を持つ人々の価値観多様性と学生だからこそ話し合えるという目線を重視し、FGM から育休の問題に至るまで様々な事例をリサーチしました。同時に自分たち自身の立ち位置や目線、無意識のうちに抱いていた自己認識と向き合いながら女性の人権保護と持続可能な社会実現のために理想とされる解決策を考え、共通項を整理し、プレゼン作成へと移りました。

③事前活動内容

〈第 1 回事前勉強会〉

参加者招集会では行ったディスカッション・ブレインストーミングを行っていたのでそこで話し合われた参加者がジェンダー、女性問題の中でも特に関心のあるトピックは何なのか、それぞれの考える女性の権利と持続可能な社会のあり方の関係性の認識、また参加者一人一人の知識がどのくらいあるかの確認をした作業を活かしました。テーブルチーフがそのトピックを参加者が作っていきたいテーマに沿って優先順位をつけて取捨選択、グループ分けをし、参加者に担当の割り振りをして担当した箇所のリサーチとシェアをしてもらいました。また本会議のファシリテーションの仕方、流れを掴んでもらうために英語のディスカッションに慣れてもらう時間も設けました。また、シェアの内容からさらに本会議に向けて中心的に扱いたい部分の共通項を話し合い、テーブルチーフがそれを持ち帰りディスカッションプランの材料としました。

〈第 2 回事前勉強会〉

第 2 回では、事前課題として一人一つテーマは限定せずにプレゼンテーションの作成とスピーチをするというものが与えられ午前中にその発表を行いました。また、テーブルチーフが前回の事前勉強会を踏まえて練り直した本会議におけるディスカッションプランの提案を行いました。また、そのディスカッションプランで話し合いを進めていくにあたり全員の共通認識の確

認が必要となる項目があったため、『参加者自体がそもそも、ジェンダー格差をじぶんごととして捉えているか、他人事と思うなればどうしてそう思うのか』と、『現実問題、ジェンダーに束縛されずに個人個人の個性が十分に発揮できる世界（招集会で参加者が言っていた日本人参加者が目指したいゴール）の実現は可能であると思うのか』について話し合いをしました。その確認作業を行い、再び本会議に向けた英語でのディスカッション練習を前回よりややアカデミックな内容で行いました。

④分科会内容

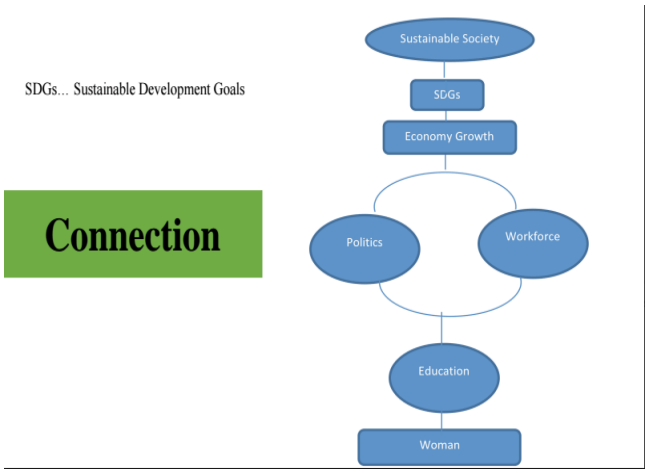
◆　分科会１・２　【Sharing prior study from Japanese members, Think definition of words】

分科会１・２においては、今後ディスカッションを進めるにあたり齟齬が起こらないよう事前知識の共有を日本人参加者から海外参加者へ行う時間、またこれから話し合っていくにあたって”定義”しておかなければならない語句である Sustainable Society と Empowerment of women の定義付けを行う時間を設けました。最初の事前勉強の共有では①日本とヨーロッパにおける女性の労働市場への進出、②日本におけるジェンダー問題の歴史、③日本とフィリピンにおける女性の社会的進出の比較、④MDGs; Millennium Development Goals と SDGs; Sustainable Development Goals の内容と違いを日本人参加者から海外参加者へプレゼンテーションの形で共有をしました。ここでの目的はすでに言及したように、事前勉強会にて日本人間で なされていたある程度必要となることが想定される知識の補填を海外参加者の間でも同様にすることでした。国内、海外、そして Empowerment of women を考えるにあたり必ず知っておかなければならない MDGs と SDGs の違いなどを取り上げました。次に、私たちが今回話し合っていく中で主軸となる Sustainable Society と Empowerment of women の定義付けをグループ２つに分かれ行いました。（本会議中の話し合いでは殆どが２つのチームに分かれて話し合いをし、全体でシェア、共通項の話し合いを全体でというやり方を採用していました）最初の Sustainable Society の定義付けでは、チーム A からは、①現在の世代のニーズを満たしていること　②同時に将来の世代の需要も損なわないようにする　③人々が発展する自由の権利をもつこと　がもっとも優先順位の高い要素としてあげられました。ここのチームからのキーポイントは『人間・環境・経済』とされました。続いてチーム B からは①現在と未来の世代両方のためにあるべき　②環境問題へのアプローチ　③人間としての生活が保たれること　④経済の安定と発展　が優先順位の高い要素としてあげられましたチーム B はキーポイントとして何よりもそれらのバランスを保つことが重要だと主張しました。各々のチームからのキーポイントを踏まえ、最終定義として”Sustainable society is a society where all the needs of its people can be filled without interrupting the fulfilling process of the future generation needs, to achieve the balance of environment and human well being by acquiring economic well being.”が決定しました。次に Empowerment of women の定義づけに話し合いに移りました。チーム A からは文化的背景を加味した教育の質をあげること、文化的標準をあげる必要性を言及するべきだという意見があげられ、チーム B からは働く場所の確保とそこでの平等性の担保、教育を通して女性と男性が平等な権利を有することをより浸透させること、権

威、機会を与えることなどが必要な要素としてあげられました。ここでの共通項は機会が与えられることや全ての権利において女性と男性が常に平等であるということがメインなのではないかという結論になり、最終定義として"Empowerment of women is a creation of an environment where men and women can have an equal opportunity and equal rights."が決定しました。

◆ 分科会３・４ 【The connection between protecting women's rights/ social progress and Sustainable Society】

キーとなる語句の定義付けが終わったところで、続いて分科会３・４では女性の権利を守ることと社会進出を促すことには具体的にどのような繋がりがあるのかを立証するリサーチに入りました。国連から出されているこの持続可能な社会と女性のエンパワーメントという概念に対して偽善なのでは、もしくはそこに本当に繋がりが存在するのかと疑問を呈す人もいることが予想されます。そういった疑問に対し信頼性を担保できるようなケーススタディのリサーチをいくつかし、持続可能な社会の実現のためには女性のエンパワーメントが不可欠であるというコネクションを証明する分科会としました。これらを調べる際、私たちがポイントとしたのが私たちが持続可能な社会として定義した３つのポイントである『人間・環境・経済』でした。この３つの観点で説得力のあるケーススタディのリサーチを行いました。



◆　分科会５・６　【What the obstacles in the way of promoting women's social progress】

繋がりが明らかにされたところで、ではなぜ未だ女性のエンパワメントの推進と持続可能な社会が実現されていないのかについてその障壁となっているものは一体何なのかについてのリサーチにはいりました。ここでは、国際学生会議の特色を生かすために日本・ベトナム・インドネシアのそれぞれのナショナリティーに分かれ自国で起きている女性のエンパワーメントを妨げているもののケースをリサーチしました。ここでは自国の問題だからこそ取り上げることが出来る問題を意識しました。その理由は、Sustainable Society があまり浸透していない理由は圧倒的に当事者意識が希薄であること、そして多くの人にあまりにも共有されていない現状などがあげられるのではないかというものがあったためです。Sustainable Society という言葉を聞いたことがない人、または聞いたことがあっても自分ごととして落とし込めていない人に届くようなミクロな問題であり、同時に一般的な問題とも関連しているものをリサーチ・分析をしました。

◆　分科会７・８　【Find solution, Points in common of several solutions】

いよいよここではリサーチ・分析をした問題点への解決策の提案にはいりました。具体的なアプローチはもちろんですが、本当に解決すべき問題点の根幹部分に確実に目を向け、より持続可能な解決策の提案に焦点を当てました。日本側からは女性が育休や産休をとりにくい現状が問題点としてあげられており、そこに対する解決策として男性が育休や産休をとる利点をより広く理解されること、そして男性女性の区別なく育休・産休（の助け）を積極的にとっていくこと、また教育が必要であることが提案されました。ここではさらに具体的なアプローチに対してもケーススタディ・それに関連する議論が展開され非常に有意義なものとなりました。インドネシアからは FGM が取り上げられ、soialization（社会化）し、広く問題意識をもつことが重要視され、NGO や SNS をつかったキャンペーンなどの運動を起こす必要性まで提案されました。ここで、最終的なまとめにはいりました。私たち学生だからこそ話し合える、提案できるものであり、より広く理解してもらえる解決策の共通項を最終的に発信するために私たちが出した解決策の共通項の議論にはいりました。あてられたのが論を重ね、最終的にもっとも焦点があてられたのが"Socialize することであり、それは人々の問題への意識、提唱されている概念自体への意識を

あげることにつながっている"と結論づけられました。Raising awareness という共通項を、そこに至るまでの経緯と説得力のある内容で発信するということで全員一致し、議論を終えました。

◆　分科会 9～12　【プレゼンテーション作成】

分科会の初めから取り組んできた流れの中の軸をそれぞれ考察し、サマリー発表へ繋げることが最も自然であるとしてプレゼンテーション作成へと移りました。１２分という短い時間の中で、全てのケーススタディを扱うことは難しかったため私たちが最も主張したい軸であるものがぶれないように取捨選択を行いました。プレゼンでは、実際に本番で話すメンバーを４人にし、スライドの作成担当などを分けました。ここでは事前勉強会で行っていたプレゼンテーションの練習が多いに役立ち、非常に効率よく進めることが出来たと思います。全体でも何度も通しでリハーサルをし、話し方や姿勢など様々な項目でフィードバックを行いました。

⑤個人所感

私はこのテーブルチーフという役職に選ばれてから本会議までの約８ヶ月間常に自分の弱さと向き合わされてきました。細かい経験から学び、得た価値観の変化は挙げればきりがないのでこの場では割愛させて頂きますが、ISC という場所で自分にとって大きな挑戦を出来たことは私にとって大きな意味を持つものとなりました。随所随所で自分のテーブルチーフとしての力が試されていると感じました。本気で議論している分、衝突や疑問は常にあったはず。そういった中でテーブルチーフに必要なのは自分の考えの押し付けでもなく皆が求めている議論を引き出し、その軌道をつくる力だということに気づかされました。

テーブル４のメンバーは協調性がありながらそれぞれの専門や視点を活かした考えをしっかり発信する力にも長けており、他者の意見にも耳を傾け、納得できないことや疑問をもったことに対しては躊躇せずにその意思を積極的に投げかけることが出来ました。私たちが発信したいことは明確でした。持続可能な開発目標というものはただの偽善なのか？否。焦点を当てるべきはこの概念や目標自体があまりにも多くのひとに共有されていないこと、そして知っていたと

してもそれを自分ごととして受け止められていないことなのです。私たちは今回の国際学生会議のテーマである「開かれた対話から実感する多様性～未来を創る私たちが今考えよう～」というテーマのもとに集まった若い学生であり、これからの未来を作っていくその当事者となる人財です。私たちはそのような立場から発信することが自己満足以上のものを自分たちも得ることができ、また他者にも与えられると信じて本会議を進め、実際にそれに見合うものを最後にはみつけました。そのような機会を与えてくれたこの会議、そしてメンバーに感謝します。

テーブルⅤ

平和に向けた最善の政策決定プロセスとは?
～熟議民主主義～

テーブルチーフ　塩田なつめ

①議論の背景

私がこのテーマを選んだのは、「対話」を今の社会の政策決定の過程でどのように実現することができるのか、そしてそのために私たち若者は何をすることが可能なのかについて多様なバックグラウンドを持つ優秀な学生たちと共に考えたいと思ったからです。先月行われた国民投票によりイギリスの EU 離脱が決定しました。しかしイギリス議会では 3 分の 2 が残留派であると言われているように、選挙と住民投票の間に「ねじれ」が起こってしまい、多くの有識者がイギリスの EU 離脱を「民主主義の失敗」と評価しています。日本においても 2015 年に大阪都構想の是非を問う住民投票が行われ、こちらも僅差で実現が見送られました。このように、意思決定の手段として選挙などの間接民主主義に代わり、直接民主主義的な国民投票が採用される場面が目立ってきています。しかしイギリスの EU 離脱、大阪都構想共に賛成票と反対票が僅差であるため、決定は住民の分裂を招きかねず、大いに疑問を挟む余地があります。このような現在の状況を受けて、枠組みだけでない何かが真の民主主義には必要なのではないか、と考え、このテーブルテーマを設定するに至りました。このテーブルテーマを換言すると、「社会の問題を解決し平和を達成するために熟議からどのようなアプローチができるか」ということになります。ここにおける「熟議」には同じ考えを持つ人だけでなく、違う意見や異なるバックグラウンドをもつ人達、「真の民主主義とは」という定義づけも様々な人達も関わってきます。そのような環境で、どう「真の民主主義を実現させるか」を考えることによって、政治学的な知識だけではなく自分の中にある考えや意見をクリアにし、また違う人との関わりの中でいかに最善の結果を出せるかについて模索し、深められる良い機会になると考えました。これは今年度の ISC の総合テーマでもある「開かれた対話から実感する多様性」にも合致しています。

②議論の具体的展開

まずは現在の民主主義の現状と問題点を洗い出すところから私たちのテーブルは始まりました。そして出てきた問題点における解決法の一環として政治的アクター同士の対話の不足の指摘が出たところで、テーブル内で「熟議」を定義し、全員で共有しました。全員で熟議という概念の共有が終わったところで、今回の会議の結果として提示する具体的なケーススタディを定め、その解決策について話し合った結果、今回の場合は熟議の実現のために力が欠かせないとの結論に至り、どうやって、どのような力を携えるか、そして力をどのようにして実際に熟議につ

なげていくかという提案を主に SEALS と「僕らの一歩が日本を変える。」の両グループをケーススタディとして具体的な解決策の提案を目指しました。

③事前活動の内容

〈参加者招集会〉

参加者招集会では自分のこれまでの人生を 3 つの大きな出来事を軸に語る”My journey”というアイスブレーキングゲームを行い、参加者それぞれが自身のこれまでの歩みを振り返って、人生の転機となった出来事を軸にして「自分」のバックグラウンドをグループ内で共有しました。このレクリエーションを経て、お互いのバックグラウンドについて理解を深めました。その後は代々木公園に行き、そこでマジョリティーとマイノリティーの関係について語り合いました。そこで、大まかにではありますが、国内参加者が本会議中に話したいことを挙げていきました。

〈第一回勉強会〉

第一回勉強会はスカイプで行いました。事前にそれぞれ共産圏、東南アジア、日本、EU の政治体制、そして、国、国連、NGO の関係について調べ、まとめレポートを書いてきていましたので、その共有をまず行いました。その後、「民主主義」に関する歴史や基本的な知識や、参加者が熟議民主主義に関する問題として具体的に取り上げたいものなどを共有しました。

〈第二回勉強会〉

第二回勉強会は京都で行いました。そこで前回シェアできなかった分のレポートを読んだ後に、ボードを使い民主主義の内容についての知識の確認や追記、会議中頻出するであろう単語の確認と英訳の共有、そしてこのテーブルテーマを設定した理由を、事業報告書を基に再度説明し、会議に向けて質問点などを挙げてテーブルテーマの基本軸を固める作業を行いました。その基本軸に基づいて参加者がケーススタディ案を出していき、幾つか集まったところでそれを参加者同士で割り振り、本会議中に実際にケーススタディとして提案できるように事前レポートを準備することを決定しました。

④分科会内容

◆ **分科会 1**

最初の分科会では初対面の外国人参加者を交えたので ISC62 の本会議で何を達成したいかを交えながら簡単な自己紹介をした後、テーブル 5 のディスカッションを円滑に進めるためのルールやハンドサインを決めました。ルールとしては、相手の言うことをしっかり最後まで聞く、時間通りに会議を始める、積極的に意見を言う、意見を言う際は手を挙げる、理解できないときは質問する、などが上がりました。

その後、ディスカッションの前段階としてコンセンサスゲームを行いました。コンセンサ

スゲームとは一人で正解を考えた後にグループで結果を話し合い、個人で考えるのと比べてどれだけパフォーマンスを上げて正解に近づけるかを競うものです。そのため、このゲームは個人戦であると同時に団体戦でもあります。自分一人だけの意見を押し通しても答えに近づけません。他人の意見も取り入れつつ自分の主張もする、まさにディスカッションにおいて大事になってくるポイントが学べるので、本会議前のウォーミングアップに最適だと重い採用しました。個人戦、チーム戦に分かれてテーブルメンバーで大いに盛り上がりました。

◆　分科会 2・3

次の日の分科会では本格的な話し合いに入りました。まずは現代社会の民主主義について知識を深めるため、事前に準備した E-democracy のレポートをまず読んでもらい、それを軸にして 2116 年を想定し、「未来の選挙はどうなっているか」「なぜそう変わっていると思うのか」をグループに分かれて考えました。話し合いではマララさんの話などがあがり、「政治に興味のある若者が現在に比べて増えるだろう」という意見や、「もっと年下の年齢層の人たちが投票権を得られるようになっているだろう」という意見もありました。また、現在のオーストラリアの例をあげ、「票を投じなければ罰金が課される」というシステムが導入されているのではという意見もありました。そこから、なぜ現在の投票システムはそうなっていないのか、そして現在の選挙制度に置ける問題点について話し合いました。インドネシアではあまりにも多くの島があるため、現在の紙媒体を介した選挙では集計などに大きな額のお金がかかる、との指摘がありました。日本の場合、投票率の低さ、特に若者の選挙離れが指摘されました。その背景には、若者の意見を汲み取りにくい人口構成などが原因としてあげられました。

◆　分科会 4・5

これらの分科会では、前回の分科会から繋げて、現在の選挙制度を「間接民主主義」として、より深く考えていくことにしました。まず導入として、選挙のドキュメンタリー映像を見せ、気づいたことを話し合いました。次にその動画を元に「理想的な候補者の選ばれ方」について議論を重ねました。多くの問題点が上がったところで、次の分科会では直接民主主義制に議題を移し、問題点についても話し合いました。また、その例として、Brexit の例があがりました。そこで直接民主主義の問題点とその解決策のケーススタディとして「Brexit はいかにして成功へ導けたか」という問いを立て、考えることにしました。その話し合いの中で、私たちは政策決定プロセスにおいて間接民主主義・直接民主主義という「枠組み」よりもその「中身」を考え、改善して行くことがより目指すところの「民主主義」に近づけると考えました。そこでどのような政策決定プロセスを踏むべきかとなった時に、十分な議論、すなわち「熟議」が大切なのではないかという考えに至りました。

◆　分科会 6・7

民主主義で重要な「平等」と「自由」を実現するために「熟議」が大切であるという意識を強く全員で共有することができたところでもっと詳しく「熟議」の定義づけを行いました。定義

づけについてですが、各々が熟議について書かれた文献を熟読してエッセンスを取り出し、テーブルメンバー全員がこれから議論する時に引用できる定義を作りました。それが”Deliberative democracy is one of democracy in which citizens and their representatives equally communicate with each other to discuss issues deeply and find justification of decisions by giving out each side’s voice of reasoning to reach common understanding of issue at hand”です。全員で単語ひとつひとつに心を配り話し合って決定しました。この部分がスムーズにできたため、その後のディスカッションも本題からずれることなく進めることができました。

◆　分科会 8・9

その後、熟議を現代社会で達成するためにどのようなケーススタディを使って達成するかを決めました。皆で話し合った結果日本の若者の政治参加の促進をどうすればいいのかについて考え、解決策をディスカッションの結果として発表することにしました。その解決策を考えている過程で、私たちはひとつ既成観念を壊すことができました。それは「熟議」を実現し、シルバー民主主義などに見られる若者の政治の場における不平等を解消する前に、若者が「力」をつける必要があるのではないかというものでした。熟議とは市民と国会の熟慮した上での議論主に指しますが、市民間での熟議も大切であることは間違いありません。ではその「力」とは一体どのようなものなのか？その問いをまずクリアにするために私たちは若者が力をつけようと模索した例、SEALDs について考えることにしました。SEALDs がしたこととして、インターネットを使った効果的な宣伝、少人数での統率の取れたデモ活動、若い人々にも受け入れられ安いラップなどの形式を借りたデモ活動の内容があげられました。また、問題点として、政策と直接関係のない安倍首相の人格否定的な言動が目立ったこと、最終的に一つの政党の傘下に入ってしまったことなどがあげられました。こうして要点を洗い出し、未来へ向けた解決策、活かせる点を考えた際に、私たちは International pressure という「力」を若者は携えることができるのではないかという話になりました。インターネットで世界に発信し、日本の若者の現状などを知ってもらうことで国際的な目を日本に向けさせるというものです。このプレッシャーは、現状を効果的に伝えられればかなり有益なものになるであろうという議論になりました。ただ、このように国際的に発信するためにはやはり、人格の攻撃などは避けた方が世界の共感を得やすいだろうという話になりました。

◆　分科会 10

SEALDs のケーススタディで熟議に必要な若者の力の付け方を考えた後、そのどのように使って熟議を実現し、その先の未来につなげていくかがプレゼンテーション作り最後のディスカッションの議題でした。私たちはここで熟議の定義に立ち戻り、市民(特に若者)と国会の熟議を実現させるためにはやはり交流の場を設けるべきであるという合意に達しました。その結果ケーススタディとしてぼくいちの活動を取り上げました。ぼくいちとは若者と政治家を結びつける活動をしていて、このポイントを含んだ新しい若者のための政党を立ち上げることを持って私たちのディスカッションの結果としました。

◆　分科会 11

この時間を使ってプレゼンテーションを作成しました。

◆　分科会統括

今回の分科会では私がもともと抱いていた既存の考えを覆すような話し合いが行われ非常に意味のあるものになったと考えます。政治学的な知識が重要になってくる部分もあったので、他のテーブルと比べて本題に入るまでの準備段階としての分科会の数が多かったように思います。その成果だと思いますが、本題に入った時に私が準備の段階で予想もしていなかったような新しいアイデアや考えがしっかりとした形で飛び出しました。また、少人数テーブルだったこともあり、全員が各々の意見を深いところまで掘り下げて議論をすることができました。それに伴って、各自の人生経験、大学での専門分野の知識がよく活かせていたように感じます。まさに「熟議とは何か」について話しているこのテーブルが一つの「熟議」の形として成立していました。

⑤個人所感

自分自身、深い議論、中身のある議論とはなんなのだろうと考えることが多く、今回、このような機会をいただいてその疑問を解消しようとしました。その中で自分の中での新たな発見、無意識に持っていた既成概念に気づき、またケーススタディとして世界、そして日本の事例を多く使うことでそれらに詳しくなることができました。平等と自由を現実世界で達成するためには一体どうすればいいのか、その問いに対するヒントをたくさん得ることができた本会議でした。最後になりますが、支援をしてくださった皆様に深く御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

分科会総括

テーブルチーフ長　山本昂亮

第 62 回国際学生会議における分科会は特別なトラブルもなく円滑に進行することができました。初めに、この会議の実施に準備期間を含めまして長い間ご尽力いただきましたすべての皆さまに心より感謝の意を表したいと思います。

私はテーブルチーフですので主にこの役職について総括では述べていきたいと思います。ISC62 が本格的に活動をスタートした昨年の 12 月、テーブルチーフに関しては以下の 2 点が懸念点として挙がっていました。1 点目は 1 年生のチーフが 2 人いたこと。2 点目はその当時まだ 3 人しか決定しておらず、残りの人員を見つけてこなければいけないということでした。もう少し具体的に申し上げますと、1 点目に関しては大学での勉学の経験が上級生と比べて浅い 1 年生が本会議の間、議論をまとめていくことができるのかという懸念でした。これは知識の面・精神的な面からです。また、2 点目としてはすでに活動がスタートした後からテーブルチーフとして入ってくるとキャッチアップがしっかりできるのかといった不安が挙がっていました。幸運なことに私は最初から活動に携わり、かつ 4 年生でしたのでこの 2 点の不安条件には当てはまっていませんでした。しかし、振り返って考えますと私が最も心配されるべきチーフであったように感じます。これは一体どういうことなのかというのを述べていきたいと思います。

結論から申し上げますとその当時皆が心配していたことは杞憂にすぎませんでした。1 年生のチーフは英語力が堪能であり、またとても 1 年生とは思えないほどの知識量・そして本会議を円滑に進めようとする熱心な姿勢が感じられていました。また、後に入ってきたチーフに関しましても時間の差を感じさせないほどの詰められた内容で、議論を作っていこうとする姿勢が鮮明に見えました。一方私はというと、童話『うさぎとかめ』のうさぎになった気分で構えておりましたので気が付くと必死に追いつかなければいけないという状態になっていました。全員の努力が実り最後には皆、本会議を円滑に進められたというように感じています。身内を褒めるというのはあまり良いことではないのかもしれませんが、こうした話を他の場でいたしますと単なる自慢話として捉えられてしまうためこの場を借りて最大限の称賛を送りたいと思います。

願わくは、本会議の間寝食を共にした仲間とまた活動をしたいところではございますが、そのようなことは万に一つもないでしょう。しかし、ここで活動を共にしたという体験はそれぞれの参加者にとって一生の宝物になると確信しております。ISC62 のすべての仲間が将来にわたって活躍されることを願って止みません。

再度ではございますが、テーブルチーフを代表して分科会での議論に関わっていただいた皆様に深く感謝の意を表しまして私からの分科会総括といたします。

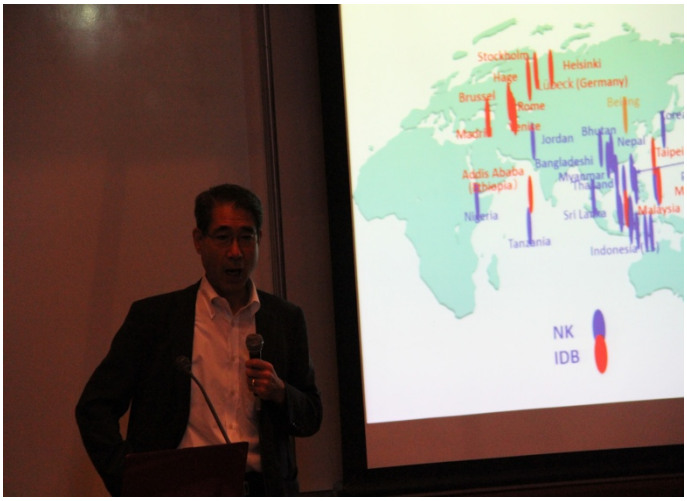
各プログラム報告

開会式

本会議最初のプログラムである開会式は、参加者全員が初めて顔を合わせる場となりました。2 名の国内参加者が司会を務め、実行委員長による本会議開会挨拶、国内・国外参加者の代表各 1 名による参加者代表挨拶が行われました。各々の本会議に向けた心境、意気込みに聴衆は耳を傾け、気が引き締まる思いで第 62 回国際学生会議は始まりました。

基調講演

第 62 回国際学生会議開会式の基調講演は、日本グローバル・イニシアティブ協会会長の綿貫雅一様にお願いしました。21 世紀において世界がどのように変貌し、また、それらに対応するグローバル人材がどういったものなのかをお話してくださいました。(写真左：日本グローバル・イニシアティブ協会会長の綿貫雅一様にお話を頂いた様子)



日本文化体験

NPO 日本文化体験交流塾様のご指導のもと、和太鼓体験と茶道体験を行いました。和太鼓体験では参加者各々が、太鼓を演奏することを通じて心を通わせることができました。茶道体験では海外参加者が慣れない正座に苦戦しつつも、和菓子とお抹茶を楽しむ様子が印象的でした。体験を通して参加者同士の親睦を深めつつ、文化交流を行うことができ、大変有意義な時間となりました。

フィールドワーク

東京駅近くの KITTE 館内に併設されているインターメディアテクを訪問しました。館内には標本が充実しており、それらに見入る参加者の姿が見られました。その後は KITTE 館内でフリータイムを設け、参加者各々はショッピングや観光に、大変充実した様子でした。白熱したディスカッションから解放され、外の空気を楽しむ参加者の表情が印象的でした。

レクリエーション

前半はイントロクイズや ISC にまつわるクイズを出題し、後半は Dictionary という推理ゲームを行いました。前半のクイズは予想以上に白熱し、どの参加者も必死に解答しようとする様子が見られました。後半の Dictionary では慣れないゲームに苦戦しながらも、チームで知恵を絞る参加者の姿が印象的でした。最終的に大変盛況に終わり、分科会のテーブルの枠を超えたコミュニケーションが促進された時間となりました。

本会議研修旅行

本会議 5 日目の 9 月 2 日に本会議研修旅行を行いました。5 コースに分かれ、浜離宮、原宿、神楽坂、上野、銀座をメインに観光した後、浅草、東京スカイツリーを全員で観光しました。東京の名所を巡り日本の由緒ある観光地から現代の日本の文化まで肌で感じることができました。また、抽選で当てた相手へお土産を買うイベントも組み込まれており、それぞれがシークレットフレンドへ思いをはせながらお土産選びをする一面もありました。気分転換もでき、海外参加者、国内参加者ともに新たな日本の一面を知れる良い機会となりました。

成果発表会

国際学生会議では分科会で話し合った成果を一般に発信する場として成果発表会を行います。5 つのテーブルが 1 週間の集大成をプレゼンテーションに込めました。本年度の成果発表会は、文京区社会福祉協議会フミコム様のお力添えにより、文化シヤッター株式会社様に BX ホールをお貸しいただき、開催しました。80 名以上の来場者があり、聴衆との質疑応答も活発に行われ、参加者のみならず成果発表会来場者の方にも其々の問題について考えていただける時間となり、会議目標の一つでもある社会発信を達成することができました。また、今年度は国連 WFP 日本事務所代表であるスティーブン・アンダーソン様に基調講演をしていただき、本会議での学びと経験を振り返ることができました。(写真左：国連 WFP 日本事務所代表スティーブン・アンダーソン様にお話を頂いた様子)

ウェルカム・フェアウェルパーティー

ウェルカムパーティーは参加者同士初めての顔合わせでしたが、終始和やかな雰囲気で進みました。食事やドリンクと共に新しくできた仲間たちと楽しそうに会話をする参加者の姿が印象的でした。途中に腕相撲大会が始まるなど、このパーティーを通じて、参加者各々が初対面とは思えないほどまで打ち解けることができました。

フェアウェルパーティーは本会議中の苦労をお互いねぎらいつつ、思い出話に花を咲かせました。その他にもプレゼントの交換や本会議中に誕生日を迎えた参加者へのサプライズなどを行い、本会議最後のイベントとして各々が思い出に残る時間を過ごしました。

閉会式

閉会式も開会式同様、国内参加者 2 名が司会を務めました。実行委員長による閉会挨拶の後、国内・国外参加者の各代表 2 名による参加者代表挨拶が行われ、1 週間の思いが溢れる参加者の挨拶に会場の雰囲気が和みました。国も言語も思想も違う学生同士がお互いを理解し、心を一つにできたと感じられた瞬間でした。最後は参加者同士で再開を約束し、第 62 回国際学生会議は幕を閉じました。

第 5 章　感想

ISC62 の感想

第 62 回国際学生会議の成果発表会を受けて

ISC62 を終えて

Table 3　常恵喬

私にとって ISC62 は、自分に対する挑戦でした。中学生で初めて英語に触れてから英語が大好きになった私は、将来は必ず英語を使って、海外と関わりのある仕事に就こうと思いました。そのためには、ビジネスで使えるくらいまで、英語の能力を引き上げなければいけないと思い、英語の勉強に励むようになりました。しかし、受験勉強のおかげで、読み書きの能力はついたものの、話す力と書く力、特に話す力が自分には圧倒的に欠けていると気付きました。そこで、大学では積極的に留学生と交流したり、英語で開講されている授業を履修したりしました。それらの授業には留学生も多く参加しており、そこではいつも日本の受動的な授業とは違った、学生同士の活発な議論が繰り広げられていました。日本人学生とは対象的に、留学生たちは皆自分の意見をはっきり持っており、それを堂々と発表していました。ですが、私はなかなか自分の意見が分からず、英語にも自信が持てずに、授業では黙っていることが多かったのです。そんな状況が悔しく、自分も留学生たちのように、しっかりと自分の意見をもって、英語で発言したいと思ったのが、ISC62 に参加した動機です。そして、この二つが私の目標になりました。

そんな英語に全く自身がなかった私は、10 日近くも英語で毎日議論することができるのか、会議が始まる前は本当に不安で仕方ありませんでした。しかし、会議がいざ始まるとそんな不安もいつの間にか飛んでいきました。英語を使うのが当たり前の環境では、英語の発音や文法の正確さよりも、とにかく言いたいことをどうにかして伝えることの方が大切だったのです。ここで、私は英語を話す勇気をつけることができました。

もうひとつの目標、自分の意見をもって活発に議論すること、は思った以上に大変でした。始めは、テーブルのメンバーが出した意見は全部正しく思えて、賛同する意見しか思いつきませんでした。ですが、留学生たちの発表の仕方を見るうちに、クリティカル・シンキングを心がけるようにすることで、少しずつ自分の意見を言えるようになりました。しかし、メンバーのひとりから意見の言い方が直接すぎるという指摘を受けるようになったのです。ディスカッションで扱う問題に、必ずしも正解はないため、誰の意見も間違っているとは限らないと教わりました。ここで私は、自分の意見を言うときは、他者の意見も尊敬して、その上で発表するべきものだということを学んだのです。

短かったものの、とても濃かった約 10 日間。さまざまな友達に出会い、時にはぶつかり、時には笑い、国や文化を超えて交流することができました。ここでの出会いは、会議が終わって 1 か月以上がたった今も続いています。そして、会議が始まる前に立てた二つの目標も達成し、期待以上に多くのことが学べました。本当にこのような素敵な機会に恵まれたことをありがたく思っています。ISC62 で得たものは、私のこれからの生涯で間違いなくかけがえのないものになったと思います。改めて、支えてくださったすべての方に感謝いたします。

ISC62 への参加で得られたもの
学生としてできることとは

Table 4　藤原聖史

ISC62 は私が大学生になって初めて参加した学生団体であり、様々なプログラムを多様な友人たちと共に経験させていただいた。参加当初は理想とのギャップや疑問・不安に駆られたりしたが、運営の方々が相談に乗ってくださったり友人と協力し合うことで乗り切り、非常に有意義な一週間となった。そんな ISC62 で得られたことはとても多いと思っているが、今日は短く絞って 2 つ述べようと思う。

1 つは私たちが議論した諸問題には、ある共通の原因が存在するということだ。これは最終日に行われた各テーブルの成果発表の結論を聞いて感じたのだが、それは人々の「知識の欠如」である。例えば私のテーブルでは女性の権利拡大というテーマを扱ったが、海外にて女性がどのような人権迫害を受けているのか、大多数の日本人は現状を把握しておらず、身近にも感じていないように思える。これは海外でも同様だそうだ。いくら政府が政策を施そうとも、国民が現状を知らずその問題を身近に感じていなければ暖簾に腕押しであろう。国民がその諸問題に対して一定の知識と理解を携え意識を変えない限り状況は良くならない。人々に世界の現状を教え問題意識を根付かせていく教育が必要と感じた。

2 つ目は学生として、そして将来社会人としてこれらの問題の解決のために何ができるかということである。これは私が参加前から悩んでいたことであった。ある時友人と会話をしているとき、彼は「無力な自分たちでも、目の前の人間から変えることは自分たちにもできる」と言った。これは一見すると無力かもしれない、なぜなら個人の力はたかが知れているからだ。しかしインターネットが普及し個人がジャーナリズムの一端を担える時代においては個人の力は絶大といえるし、目の前に立つ人の意識を変えることができればそこから輪が広がっていく。そうして認識を改めた人々は彼らの子供の世代に思いを継承することによって、次世代からの状況改善を加速化させることができる。時間はかかりいわばゲリラのような手法であるが、これが着実な方法であることも事実である。

学生会議を冠する団体に懐疑的な人間は少なくない。実際この団体に私が参加しようと決めた時も、私に「学生会議で得る結論に価値はない」と断言する人もいた。確かに建設的な議論を最優先で見るのならば、このような議論は有識者または実際に施策を行う政府の方々にお任せするのが賢明であろう。しかし学生会議が無駄なものかといわれると私は決してそうは思わない。世界各地から同じ問題意識を持った学生が集い、将来私たちの世代が担う最需要課題に向き合い、理解を深める、そのプロセスが大事なのではないだろうか。ISC には様々な団体や機関からご寄付をいただいているが、その大切な寄付金や多くの時間を費やしてでもこれらのプロセスを学生時代に経験すること、これは非常に将来を考えるうえで重要ではなかろうか。

INTERNATIONAL STUDENT CONFERENCE 62 PARTICIPANT REPORT STATEMENT

Table 2 Cordova Putra Handri Ansyah

The International Student Conference or ISC is an annual event held by ISA in Japan. This year, ISC reached the 62nd year of unilateral global youth cooperation, elevating contemporary topics such as education, politics, and humanitarian issues into several tables. Moreover, ISC provides expansive Japan culture experiences through multiple regions, in embracing the uniqueness and strengthen the bond between Japanese and international delegates. As a milestone, The International Student Conference 62nd brings out the main theme of culture diversities, as part of regional to global development goals of *sustainable development goals* under the supervision of United Nations. Furthermore, as part of the international participant in ISC 62nd , through this paper, I write the brief to specific reports about the event.

In general, The International Student Conference (ISC 62nd) manages to accomplish over 80% of total management score. The score, consists of several points, such as; (1) *Human resource management* (2) *communication* and (3) *media and publicity*.

In **human resource management**, I see good cooperation among the committees, and simple organigram or organizational structure. In terms of committee efficiency, ISC 62nd deserves majestic appreciation for able to guide, and introduce the elegance of Japan cutting-edge culture and amusing places such as Ameyoko, Kitte Museum, Tokyo Edo Museum, Tokyo Sky Tower and the epic Asakusa, and other mesmerizing places in Tokyo.

Moreover, the issue in terms of human resource management is during the early arrival in Kansai International Airport. There are two international delegates, were given the wrong address about their route to each ST location, such as station names. But later, the committee are able to act quick to revise the incorrect address. I really appreciate the quick action but next time, please be careful.

In **communication**, I really appreciate the committee efforts to guide, blend, and build memorable relationship among the participants. It is also, my greatest honour to say that all of the table chiefs are amazing, in leading each teams during the main conference event. Moreover, the Japanese participant are indeed inspiring for their multiple skull-breaking life experiences, and life gazing backgrounds. I deeply believe that Yuuki Kamo and Marina Saiuchi have managed to develop such excellent structures and qualifications in committee to Japanese participant selections. *Well done, ISC !.*

Moreover, the issue in terms of communication is about English language usages among the Japanese participants and committees. I see that most of the Japanese committee and participants are good in English, but during the post-conference event (continuum rate of communication in several SNS, such as Line is low). The Japanese are less-speaking than the international delegates. I

deeply understand that this issue is individual-based, but to maintain sustain and long-term relationship with members of ISC 62nd grand family, each have to aware regarding the importance of establishing unilateral friendship as professional networks in the upcoming future. *Never feel embarrassed about this, just speak out and we'll reach you !*

In **media and publicity**, I profound several minor issues. First, there's only single-handled photographer during the event, Hidaka. As in my experiences, the ideal number of photographer / videographers are two to three person. The reason is to provide wider coverage and variety of publications (such as videos from the videographer) by example in crowded yet famous place such as Asakusa, or during the presentation sessions of each tables during the main conference.
Another minor issue, is about ISC website, specifically by the domain (www.isc-gonna.info). Based on the domain, I suggest that the future ISC should be using (.com) for better publicity and website visitor percentages for ISC (the example, such as www.isc-japan.com). The reason of using (.com) is because of the high search internet index that able to boost publicity of future ISC. Moreover, regarding the website too, during the early stage of research about the event, the keyword 'ISC' needs to be double-searched because of the misinterpreted result from Google Search engine. I believe that this issue must be address soon, due to it's importance among universities to provide official permission letter, and in some minor cases, parental security needs.
In terms of UI / User Interface, ISC website is 7.0 out of 10.0 – contents are good, but some primary information such as main address of National Memorial Youth Olympic Centre and Tokyo Youth Hostel is not available, specific route maps and emergency numbers are not available too. This issue affects how ISC aim to attract more participant from various countries outside of Asia, and again as I mentioned before, for delegate's parental security proofs for ISC

Sincerely,

Cordova Putra Handri Ansyah

ISC62 Report

Table 4　Tran Anh Thu

As I might say, being this year participant had actually become a life-changing experience for me. I'm so honored to be a part this year international conference. Somehow, I couldn't recognize myself from what I have become after 15 wonderful days in Japan, a wonderful journey with my new wonderful friends from all over the world.

As an international relations student, I think ISC62 was actually my life-changing experience. Through this conference, I had an opportunity to take a deeper look at my study, a chance to ask myself whether this is major is what I really love. In addition, the answer is yes. This year 5 topics to me were really interesting and practical. Every participant was given a chance to discuss and speak up their minds in order to help not only their countries but also other nations. During our discussions, I had to admit that there were some arguments between members. However, I always appreciate those moments since we got to know each other better and better after each. Besides, in my perspective, I feel so lucky to be an audience to the speeches of Mr. Watanuki and Mr. Anderson, which were also one of the precious sources for my study later on. I must say thank you so much ISC and ISA for giving me this great honor.

This part, I would like to dedicate to the collaboration members. You guys are just so awesome. Each person has different personalities and style, but together, you guys are a really strong team who gave us such an unforgettable summer. My admirations started right at the moment I got to Kansai International Airport, when I saw your carefulness and enthusiasm while picking each participant up and then sent us to our study tour city.　We have never met before, but the way you welcomed us, made me feel like we've been friends for such a long time, and now I am finally back home after a long long time being far away. I could say, that I felt strongly safe when being with you guys. And for the very first time, I could finally be a part of a really professional conference. One of the reasons why I decided to join ISC was because I wanted to experience Japanese working style, how responsible, punctual and thankful you are. Now, being at my hometown, I proudly said that, my decision months ago was my best one ever. Somehow, I could say that my life had positively changed after this conference. And most of my change, I must say thank you so much to each of the collaboration members for teaching me, showing me how to have not only good skills but also personalities. We laughed, we cried, we cherished, we were "high", and all of that will become the most precious memories of my entire life.

For my few last words, I can't be sure that we will have chances to see each other again in the future, be in the same conference again to discuss domestic and internationals issues, but let's together, promise our own society that we will do our best, to take actions like what we said at the summary, and make our world a better place.

2016 年 9 月 5 日

第 62 回国際学生会議の成果発表会を受けて

経済人コー円卓会議日本委員会　専務理事兼事務局長
九州大学経済学府　客員教授
石田　寛

私は、不確実で不透明な時代（食糧難、シリアの難民問題、テロ行為など）の中で、資本主義の立ち位置や存在感がこれほどまで形骸化していくことに、とても危機感を持っています。資本主義が生み出した『負の遺産（格差社会)』をどのように解決に導く事ができるのか、この地球中に生きている人類一人ひとりが力を合わせて、真剣に考え、実行していかなくてはならない時代になっていると危機感を持っております。

こうした中で、第 62 回国際学生会議では、加茂実行委員長の強いリーダーシップのもとで、自主的に同じ志を持つ人々が日本だけではなく、世界 6 カ国から総勢 37 名が集い、『開かれた対話から実感する多様性～未来を創る私たちが今考えよう～』という総合テーマを設定し、以下の５つのテーブル（「ユース世代の難民問題」、「教育による幸福の実現可能性と限界」、「人道的介入～「地球市民」の限界と可能性について～」、「持続可能な社会と国際協力～女性の人権から見る社会～」、「最善な政策決定プロセスとは～熟議民主主義～」）において、９日間熱い議論を交わしました。

私は、未来を担う若い世代が、お互いに価値観を共有しながら、社会的課題を解決していくためにどうすべき、認識を深めたり、対策を講じることができないか真剣に考えていくことに強く共感しました。

また、この会議が開催する前段階より事前打合せとして、各テーブルチーフが私のところに集い、各チーフが選択したテーマでどういったディスカッションをこの会議ですべきか真剣に話し合ってきました。

各テーブルの成果発表（9 月 5 日）をお聞き、いくつか感じたことをコメントします。

- 参加されたメンバー同志が、短期間にこれだけのアウトプットを成し遂げる一つの要因には、おそらくお互いの強い絆、信頼関係を醸成できたことを証明していると、強く感じました。
- 各テーブルの発表内容は、いずれも自分ごと化した形で、各自がしっかりとその内容の本質を追求し、そこから何をすべきか真剣に考え抜いたものであることが発表を聞いて伺い知ることができました。
- 次に自分たちがどういった取り組みをすることができるのかアクションに結びつけたテーブルとそうでなかったテーブルとに分かれていましたが、できれば小さなことでも良いので何か具

体的な活動に結びつけるようにすることができると良いと思いました。
テーブル１「ユース世代の難民問題」については、今後世の中に難民問題を真剣に考えてもらえるような気づきの場を提供できるように、「トークショー」のイベントを開催したいと宣言したことは素晴らしかった。まさに世論形成をするためには、「気づき」、「理解」、「浸透」のプロセスを得ながら、社会的認知度を高めていくことができますので、是非実現してもらいたいです。

物事の本質を見極める「心の目」を養うためには、一人ひとりが客観性を保持し、普遍的に真理を追究することを心がけていくことが肝要ではないでしょうか？そのためには、「自分を知り、他者を知り、世界を知ること。
そして世界から自分の立ち位置を見極めること」だと私は常日頃から思っています。

各テーブルの成果発表をお聞きして、多様な価値観の中で多面的に議論し、各テーブルチーフが四苦八苦しながらきちんと纏めたことに敬意を評します。皆さまがこの限られた時間内で議論を纏めてきた苦労は、決してお金を払っても買えるものではないですし、これからの人生においても、大変貴重な体験をされたと確信しています。

最後になりますが、私はいつも以下のことを念頭に置きながら、行動していますので、ぜひ皆様と共有させてください。
・自分を知り、他者を知り、そして世界を知ることができるか？
・指示待ち型人間から脱却し、提案指図型人間へ脱皮できるか？
・自由自在に発想を変えて、多面的な切り口で物事の本質を見抜けるか？
・ぶれない判断軸を持ちながら、決断できるか？
・自らが課題の抽出、何をすべきか理解し、行動・実践できるか？
・自分自身で自らのあるべき姿を磨き上げていくことが出来るのか？
・世界観の中で、自らの立ち位置を把握しているか？
・多様な価値観の中で、持論形成ができるか？

そして、自らの信念は、“自らを正し、誰が正しいではなく、何が正しいか”であります。

これからも皆さまお一人ひとりが平和な社会秩序が構築していくことの重要性を念頭におきながら、自らの道を切り開いていくパイオニア精神を持ち続けていくことを祈念しております。

また、どこかで皆さまと再会できることを楽しみにしています！

以上

協賛後援

主催

日本国際学生協会
（I.S.A. : The International Student Association of Japan）

助成

国際教育振興会賛助会
公益財団法人平和中島財団
独立行政法人国際交流基金
公益財団法人双日国際交流財団
公益財団法人三菱ＵＦＪ国際財団

協賛

文化シヤッター株式会社

後援

外務省
一般財団法人国際教育振興会
経済人コー円卓会議日本委員会
一般社団法人日本グローバル・イニシアティブ協会

第 62 回国際学生会議　事業報告書

発行責任者：加茂　悠希
編集責任者：才内　麻里菜

発行：日本国際学生協会　第 62 回国際学生会議実行委員会
〒662-0891　兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155
関西学院大学文化総部　I.S.A.

ISC

International Student Conference